

直江木導句集

水の音

直江木導句集 水の音

「やぶちゃん注…直江木導（寛文六（一六六六）年…享保八（一七二三）年）は近江彦根藩士。上松氏に生まれたが、直江氏の養子となり、光任と名乗った。別号に阿山人。姓は「奈越江」とも書く。芭蕉晩年（元禄五（一六九二）年から七（一六九四）年）頃に蕉門に入った最晩年の弟子の一人であるが、森川許六が記した「風俗文選」の「作者列傳」には「木導は、江州龜城の武士なり。直江氏。自ら阿山人と號す。師翁、奇異の逸物いちぶつと稱す」（原文は漢文）と記されてある。芭蕉が自らの「古池や」と併称して絶賛したとする一句に、

春風や麥の中行く水の音

木導

があり、本句集の名もそれに因んでいる。但し、何故か、本句には採録されていない。因みに、私は、「[柴田宵曲 俳諧隨筆 蕉門の人々](#) [木導 一](#)」と、同「[二](#)」、及び、同「[三](#)」の総てのオリジナル電子化注を終えている。木導を殆んど御存じない方は、まず、そちらを通読されてより、この句集を読まれた方がよろしいかと存ずる。なお、そこで私が注したものは、ここでは原則、注さないつもりである（読みや意味が若い読者には難しいと判断した部分には煩を厭わず、再注してはおいた）。

本句集は木導の遺稿句集として残されたものであるが、「[柴田宵曲 俳諧隨筆 蕉門の人々](#) [木導 一](#)」に示された通り、原稿自体は木導が亡くなる享保八年六月二十二日（一七二三年七月二十三日）の一ヶ月前の五月上旬に外姪勇水に記させて句集「水の音」として脱稿したものであった。

底本は、写本から初めて本句集が二百三年もの後に出版の日の目を見たところの、[野田別天楼](#)（明治二（一八六九）年…昭和一九（一九四四）年…俳人。備前国邑久郡磯上村（現在の岡山県瀬戸内市）出身。本名は要吉。明治三〇（一八九七）年より正岡子規の指導を受けて『ホトトギス』などに投句した。教職にあつて報徳商業学校（現在の報徳学園中学校・高等学校）校長を務めた。「京阪満月会」では幹事を務め、[松瀬青々](#)の『[倦鳥](#)』の同人として関西俳壇で活躍、その後、昭和一〇（一九三五）年に『[雁来紅](#)』を創刊・主宰するなどした。俳諧史の研究では頼原退蔵と親交があった）開題（ママ）。安井小洒（明治一一（一八七八）年…昭和一九（一九四二）年）は俳人で蕉門を中心とした俳文学研究家にして兵庫の「なつめや書莊」店主。本名は知之）の校訂になる「[蕉門珍書百種](#)」（大正二五（一九二六）年蕉門珍書百種刊行会刊）の「[第十一編](#)」の「[水の音](#)」の、[国立国会図書館デジタルコレクシヨンの画像](#)を視認して、起こした。

句の間は一行空けた。句は底本では均等割付であるが、再現していない。踊り字「く」は、正字化するか、「々」に代えた。前書はポイント落ちであるが、同ポイントとした。

既に述べた通り、どうしても必要と私が判断した部分、私自身が躓いた箇所のみ、注を附した。清音表記が甚だしく多いことと、送りがなの送り方も、かなり悪い。しかし、江戸

の俳諧撰集ではこれは常識のレベルで、ちょっと立ち止まって考えて貰えれば、どれも決して難読ではない。若い読者を意識して多少はサービスして読みを示したが、基本、自身で詠んで映像を想起されたい。それが発句の醍醐味である。但し、底本には最後に編者野田別天楼が「開題」の最後の方で、『解説』として、実に十ページに及ぶ詳細な各部注（箇条書き）を纏めておられる（[ここ](#)の左ページの終わりから五行目の『水の音解説』の次の行以降）。しかし、それをそのまま配したのでは、如何にも注と本文を比較し難いことは明白である。そこで、それらを分割して【注】として句などの後に配した。その際、頭にあるページ数を示す部分分は、ここでは意味がないので、省略した。

私は木導死後の二百九十七年後の今、全世界の人が、どこか近代俳句の感覚へと通底しているような、忘れられた木導の句群を目にすることが出来る、その一助を担うことが出来ることを光栄に思うものである。彼の纏まったテキストも、また本格的な評釈も、少なくとも私はネットどころか、活字本でも見たことがないからである。

【二〇二〇年九月十六日 藪野直史】

水の音

野田別天楼開題
安井小洒校訂

水の音

水の音

治國に亂をわすれざるは武士の常なり其常に千里の雲路はるかの國々の風俗を尋ね味ひよく知るをさして是を兵法に因間内間といふ、此一すしを兼て求をかはやと風雅を種となしてはせを庵の松の扉をたたき翁の流を五老井と共に汲つくす事三十年かれこれの便をつたひ蕉門の俳友とところどころに數をつくせり其あらましを五老井雨夜物かたりにおよびぬれは翁しはらく目をふさき奥齒をかみしめ皺の手をはたと打謀略のたくましきを深かんじ玉ふと也かの折から予か麥の中行水の音をも聞たまひて翁曰いにしへ伊勢の守武か小松生ひなてしこ咲るいはほ哉我か古池やかはす飛込水の音今木導か麥の中行水の音此三句はいつれも万代不易第一景曲玄妙の三句也誠に脇をなしあたへんと許子になかれに麥をかゝせてかけろふいさむ花の糸口と筆をとり給ひしを初となしていひ捨し句ともとりあつめ阿山の鎮守に奉納せり

阿山下木導自序

印

印

【注】「兵法に因間内間といふ」。兵法は孫子を指す。孫子用間第十三に「用間有レ五。有ニ因間一、有ニ内間一、有ニ反間一、有ニ死間一、有ニ生間一。」と見ゆ。この因間を一本には郷間に作れり。荻生徂徠の説には、郷間の方正しといへり。郷間とは敵の郷民を此方の間者として川ひること。内間とは敵の内にある人を此方の間者に使ふこと。

「五老井」。森川許六の別號。江州彦根の武士、名は百仲、字は羽官、又菊阿佛といふ。

「麥の中ゆく水の音」。上五「春風や」なり。

「伊勢の守武」。伊勢内宮の神官。藺田長官中川半太夫といふ。俳諧道の鼻祖。

「小松生ひなでしこ咲るいわほ哉」。この句を守武の作とあれど、實は飯尾宗祇編の新撰菟玖波集にある智蘊法師の作にして、連歌の發句である。

「誠に脇をなしあたへん」。「誠に」は「試に」の誤かと思はる。

「許子」。許六のこと。

「やぶちゃん注…自序は底本のここから。なお、以下の句部の冒頭もそうだが、最初の「**印**」は、底本では本文より頭一字分、上がっているが、必要性を認めないので再現しなかった。なお、別天樓の解説注は（底本のここから）、二行に互る場合は一字下げが行われているが、再現していない。また、この自序については、「柴田宵曲 俳諧隨筆 蕉門の人々 木導 一」でも宵曲が全文を示しているが、私は宵曲の示すままに無批判に読んでしまい、別天樓の指摘する句の誤りに気付かなかったことをここに自白して、注を追加しておく。

「新撰菟玖波集」室町後期の準勅撰連歌集。全二十卷。宗祇らの撰。明応四（一四九五）年成立。永享年間（一四二九年～一四四一年）以降の約六十年間の作品約二千五十句を収録する。代表歌人は心敬・宗砌・専順など。

「智蘊法師」蜷川智蘊（？～文安五（一四四八）年）は室町時代の武士で連歌作者。新右衛

門親当ちかまさと称した。室町幕府に政所代として仕えた。和歌を正徹に、連歌を梵灯庵主に学び、一休に参禅した。「竹林抄」の「連歌七賢」の一人。「新撰菟玖波集」に六十六句が入集する。句集に「親当句集」がある。彼の「小松生ひなでしこ咲るいわほ哉」は、「新撰菟玖波集」の版本を持たないため、手古摺ったが、「人文学オープンデータ共同利用センター」の「日本古典籍データセット」「新撰菟玖波集」を最初から何度か全篇を視認する中で「巻第十九」のこちらに（右頁最終行）、「小松おひなてしこさけるいはほかな」と発見出来た。

「阿山下」不詳。三重県阿山郡阿山あやまが嘗てあり、ここは滋賀県との県境であって、滋賀県甲賀市（グーグル・マップ・データ）と接してはいるが、彦根とはあまりに遠過ぎる。また、底本の別天樓氏の解題には『この集は木導の住める彦根の阿山の鎮守に奉納したものとのこと』とあり、彦根藩士である彼が住んだ場所は、句から見ても、現在の彦根の琵琶湖に近い場所ではなくてはならない。彼の別号「阿山人」（恐らくは読みは「あさんじん」）もその地名（或いは通称）に因むものであろう。しかし、彦根市に「阿山」の地名も、神社の名も見当たらないのである。当初、滋賀県彦根市石寺町にある荒神山（こうじんやま・グーグル・マップ・データ）の異名かと思つて調べたが、見当たらなかった。識者の御教授を乞うものである。」

印

四季 不同

黒雲にくはつと日のさす紅葉哉

虚無僧の對の出立の袷かな

とつと吹く風や鶉の聲の上

杉と過ぎ木すたふこゑや夜の鹿

うつすりと水増雲や雁の聲

白魚のすへり馴たるいかりか

雌メントリを見かへす鶏の寒サ哉

生壁にぬり込門の落葉かな

地紙箱脇にかい込ムあわせ哉

【注】「地紙箱」扇の地紙にて、扇に張るべく裁ちたる厚き紙、それを納める箱のこと。

ぬり枕うるしくさゝよ夏座敷

明月に鳴て出ぬかほとゝきす

水鼻に泪も添ふるねこの戀

「やぶちゃん注…「ねこ」（猫）「の戀」は春の季題。」

初雪や爪燕脂のつく雪礫

うつくしき指櫛持やすまふ捕^{トリ}

ふりわけに蒔や白米壺^{ケシヘニノ}紅藍花

「やぶちゃん注…これは思うに、「白米壺」の「米」は「芥」の字の書写の誤りではなからうか？ 「芥壺」では意味が判らぬが、読みに従うなら、「白芥子^{しろけし}」を想起出来る。ケシ（キンポウゲ目ケシ科ケシ属ケシ *Papaver somniferum*）の園芸品種で花が白色のものである。以下の「べにのはな」、則ち、ベニバナの種と、成長して花を咲かせた後の紅白の美しい景を想起させ、心理上の色彩のコントラストが意識に昇るように木導は確信犯で詠んでいる。」

眞白に寒しほ涼し若狭鯛

夏草や毛のぬけ替る黒の馬

鳥居より奥て鳴けりほとゝきす

二階から二階へ送る新酒かな

雁金の聲ひきまはす入江かな

屏越にさらし呼けりあけひ草

【注】「屏越に」。塀越に同じ。

牛臭き風のあつさや小松原

明月や撞^ツ入あひのかねの上

振袖を小だてにとるや鶏合

月しろといふ題をとりて

月代に大津支度やしほつふね

【注】「月代に大津支度やしほつふね」。鹽津は近江淺井郡にあり。琵琶湖北岸の港。句意は鹽津より大津通ひの船が、月代時に出帆の用意をなしゐること。

「やぶちゃん注」・「月代」は「月」・「月の出」のこと。

「しほつ」「鹽津」鹽津。現在の西淺井町鹽津浜附近（グーグル・マップ・データ）。」

駒鳥のかうしに鳴やかきつはた

みりん酒に酔ふたる顔や朧月

客ふりに一入ほむるふくへかな

垣越にいひあわせけり藥くひ

「やぶちゃん注」・「あわせ」はママ。」

五老井の墓に詣て

一本の櫓に添る野菊かな

鶯や此一聲を□□が梅

【注】「鶯や此一聲を□□が梅」。一聲をの下、原本に「補之」らしき文字あり。意義不明の爲、或は誤讀ならんこと恐れて、缺字となせり。

うくひすやほつこりと夜の明ル空

出かはりや火を吹く顔のはつかしき

うちあけるぬれたる桑や五月雨

野猪のいかり毛はしるあられかな

五老井の山櫻短冊

さつと吹さつと散りけり山さくら

かけろふをたよりにのほる雲雀哉

小野寺法樂寺は眞言の古地にて常ニ經文を書きて草

野川へ流シ侍る

かはす乗ル經木は卒都婆小町なり

【注】「蛙乗る經木は卒都婆小町なり」。謠曲卒都婆小町に、小野小町年老いて零落し、卒都婆に腰かけて憩へる狀を記せり。經木に乗れる蛙は、卒都婆に腰かけたる小町の類ぞといふ意。

「やぶちゃん注」注…「法樂寺」は地名と読んだ。「草野川」は滋賀県長浜市を流れるが、その南東直近に、[滋賀県長浜市法樂寺町](#)（グーグル・マップ・データ）があり、そこに東で接して小野寺町があるからである。見当違いということであれば、御指摘戴きたい。」

爪とりていと心地よし春の雨

繪草紙を摺て買けり春の風

五月雨に暎たる狀や嶋間屋

【注】「暎たる狀や」。暎字誤あらん。「さび」と訓むべきか。

「やぶちゃん注」注…「暎たる狀や」は「ばくたるさまや」と読み、「暎」は「かび」の意である。私は特に誤字とは思わない。」

三ヶ月にあまされて鳴千とり哉

うくひすや面テつかひて鳴キ出す

更ルほと汗くさくなるおとりかな

半鐘の音さへ渡る霜夜かな

庭石を賣ル場涼し手水鉢

手垢にてひかる柱の寒サかな

大坂で元服するやすまひとり

川壹つ道一筋のやなきかな

御命講や今年のわたて綿帽子

【注】「御命講」。「オメイコウ」と訓む。大御影オミエイク供の訛といふ。陰曆十月十三日日蓮上人の忌日に營む法會のこと。

臘八ややけとの手をは耳の環

【注】「臘八ややけとの手をは耳の環」。臘八は十二月八日のこと。この日釋尊が菩提樹下に

て曉星を見て成道せられた因縁により、佛徒に成道會を修し粥を煮て食ふ。この句『芭蕉門古人眞蹟』に收めたる木導直筆には「火傷につかむ耳の鉞」とあり。

「やぶちゃん注」…「鑲」「鉞」ともに「くわん」（現代仮名遣「かん」）と音読みするが、私はこれは前の「耳の」から「たぶ」と読みたくはなるが、恐らくは「クワン」であろう。無論、摘まんだのは耳朶みみたぶにほかならぬのだが、成道会じょうどうえのその夜には別天樓が述べておられる通り、「臘八粥」を炊いて食すのであるが、この句はその粥を煮ている折りから、熱い粥鍋に触れてしまっと思わず耳朶を摘まんだというシークエンスを句にしたものと思う。ところが、この「臘八粥」は釈迦が成道する直前、スジャーターという長者の娘から乳糜にゅうび（粥に牛乳を加えたもの）を施されて、体力を回復したことに因んだものであり、スジャーターは必ずや、装飾として耳環みみわをしていたに違いないと想起したとすれば、この臘八粥を炊いていたのはスジャーターのような乙女であったのではなかったか？ さすれば、彼女の可愛い耳朶をかく言い擬えたのではなかったか？ なお、「鑲」「鉞」は同義で、本来は本邦では机・簞笥などの引出に付いている小さな金属製の小さな輪状になった引き取手を指すことが多い。無論、これを木導独りの景として読むことも可能ではある。その場合の「クワン」は淋しい諧謔となる。それでもよいが、それではあまりに木導が可哀そうだと思う私がいるのである。大方の御叱正を俟つ。」

白禿風シラクホの小僧も寒し梅の花

【注】「白禿風シラクホ」。しらくぼは又「しらくも」ともいふ。兒童の頭に生ずる瘡の一種、白くて鱗のごとき狀をなす。

荷口とく奈良の團扇やほとゝきす

雲水の僧の取巻きぬたかな

初雪やあしあとは皆女中達

秋ふかくもてなすふりや花すゝき

五位鷺の糞のにほひや夏木立

「やぶちゃん注」…底本は糞に右傍線を引くが、版組のスレととって示さない。」

傾城のおわれて出るや松に藤

あせくさき簑の雫五月雨

麥は黄に早苗は青しほとゝきす

虎の皮蠟虎の皮や冬こもり

【注】「虎の皮蠟虎の皮や冬こもり」。「獵虎」正し。海獸の名「らつこ」と讀む。毛柔軟にして毛皮の最上品とす。

「やぶちゃん注…ラッコ（一属一種の食肉目イタチ科カワウソ亜科ラッコ属ラッコ *Enhydra lutris*。三亜種いるが、本邦に関わるのは、*Enhydra lutris lutris*（基亜種。千島列島・コマンドルスキー諸島（カムチャツカ半島の東百七十五キロメートルに位置する諸島）に分布。大型で頭骨が幅広く、吻部が短い）と *Enhydra lutris kenyoni*（アリユーシャン列島からアラスカ州南部に原産。基亜種に比べて頭骨が短く、吻が長い）の二亜種である）の皮は江戸時代にはアイヌの人々との北方交易や東北からの移入によって既に知られていた。ラッコの記載は江戸中期の木導と同時代人である寺島良安の「和漢三才圖會卷第三十八 獸類」に「獵虎（らつこ）」として載っている（リンク先は私の電子化注）。なお、「ラッコ」は「臘虎」とも書く。書写する際に崩しを読み間違えたものであろう。」

暮の鐘きかすにしほむ芙蓉哉

三味線の音にはり合ぬほたんかな

傾城のかはゆかりけり團扇うり

小座敷の客の土産や水仙花

内井戸の音も涼しや魚の店たな

青天にかもめの聲の早苗哉

御命講や十夜参りにすりかける

「やぶちゃん注…先の別天樓の注にある通り、「御命講」おめいこうは陰暦十月十三日の日蓮上人の忌日に営まれる法会であるが、この時期、浄土宗で所謂、「お十夜」じゅうや、「十夜念仏法要」、旧暦十月六日から十日までの十夜に互って行われる念仏勤行とぶつかっている。されば、この句は「お十夜」の称名念仏のそれ対して、数珠を擦って、殊更に声高にお題目を挙げているさまを詠んだものか。」

竹馬に曾我兄弟や門の雪

こほこほと馬も疾行枯野かな

揚技屋を供につれ行涼みかな

元日や神の鏡に餅の影

川音を左右に結ふ柳かな

明月に東坡か腰は驚馬^ドの杳

破魔弓や菊はいもうと梅は兄

うくひすや唇うすき脣のさき

鶯やさゝやひてとる歌かるた

杉かわをいたゝく賤のあわせかな
「やぶちゃん注」・「あわせ」ママ。「拾」であるから、歴史的仮名遣は「あはせ」が正しい。
以下同じ。」

梶原も簀着て聞やほとゝきす

散たびに齒にこたへけりけしの花

にんどうの花のにほひや杜宇

出女の羽ありをふるふあわせかな
「やぶちゃん注」・「あわせ」はママ。既注。「出女」は「でをんな」で、各地の宿場にいた客
引き女のことを指し、多くは売春婦を兼ねた。」

眞黒にわらやねふきや雲の峰

六月の松の葉色やくものみね

煤拂の支度て搗や麥の秋

尺八に持そへ行やかきつはた

上氣する顔ひやしたる柳かな

明月や江はさわさわと鶴の聲

押合て目白のあたたる火燧かな

細々と道一筋や鹿の聲

ぬり物にうつろふ影や菊の花

初雪や矢箆竹植る路次の内

【注】「初雪や矢箆竹植る路次の内」。矢箆竹は矢幹に用ひる竹。

「やぶちゃん注」・「矢幹」は「やがら」。矢柄。矢の主たる幹の部分。鏃^{やじり}と矢羽根を除いた箇所。多くは篠竹で作る。これ自体を「箆」^の「矢箆」^のとも呼ぶ。」

いなつまの拍子になけるすまふ哉

藁筆に手をあらせけり冬籠り

もカ

かうふりの影おほろなり梅の月

【注】「かうふりの影おほろなり梅の月」。原本「かうふり」と書き、「ふ」の右傍に「もカ」と記せり。蝙蝠は古名「カハホリ」といひ、音便にて「カウホリ」といひ、又「カウモリ」と呼ぶ。

すまふとる腹につきけり^{アブ}蛭の聲

【注】「^{アブ}蛭」。蟲の名、單に蛭と書き、虻とも書く。

山ぶりにぬれてそ出^ル渡り鳥

嵯峨小倉おちあふて鳴小鹿かな

葛^{ベニタケ}花菜や明^{ベニタケ}ケ野のびくになつかしき

【注】「葛^{ベニタケ}花菜や明^{ベニタケ}ケ野のびくになつかしき」。「びく」は竹にて作れる籠。

「やぶちゃん注」・菌界担子菌門ハラタケ亜門ハラタケ綱ベニタケ目ベニタケ科ベニタケ属 *Russula* のベニタケ（紅茸）類の茸。同属には多数の種が含まれる（赤くない種もある）ので同定は出来ない。食用種もあるが、有毒種も有意に含まれ、毒性の有無もよく判っていない種もある。貝原益軒の「大和本草」では「卷之九 草之五」の「菌類」に、『紅菰』で立項し、右に「ベニタケ」左に「シモコシ」とルビして、『色如胭脂』、「常熟縣志」に出づ。又、別に赤色なる菌あり。是、「本草」「芝栴類」の「葛花菜」なるか。霜後、山野に生ず」とある。「本草綱目」のそれは、「卷二十八」の「菜之四」に出る、

*

葛花菜【綱目】。

釋名葛乳。時珍曰、『諸名山皆有之。惟太和山采取云、乃葛之精華也。秋霜浮空、如芝、菌涌生地上、其色赤脆、蓋蕈類也』。

氣味苦、甘。無毒。

主治醒神、治酒積【時珍「太和山志」】。

*

とあって、食用で無毒とするが、これは中国の明代だから当てにならぬ(種同定が出来ぬし、化生説みたように葛の精華などとも言っているのだから)。そもそもが益軒の異名とする本邦の「シモコシ」にしても、ハラタケ目キシメジ科キシメジ属シモコシ *Tricholoma auratum* であるが、本種は、色は黄色から黄褐色、中央部はやや赤褐色を帯び(画像見る限りでは有意には赤くは見えない)、困ったことに、信頼出来るキノコ・サイトでも多くが食用とするものの、一部の記載では、海外で同属の近縁種で中毒例があり、慎重を有し、多く食するのは危険とする記事もある。だいたいからして木導の見たそれが、ベニタケ類であつたかも知判らぬ。赤い茸は幾らもあるからである。また、それを食対象として木導が見た可能性は、私は極めて低いと思う。それは鮮やかに「紅色」だったからこそ映像が生きるからであり、それは彼の視覚的な懐かしさであり、彼がその茸をとって食おうと思つているとは微塵も思われなからである。彼の食欲のベクトルが少しはあつたとすれば、それは恐らく同じ懐かしさを視覚的に与えてくれた魚籠で獲れるかも知れぬ何物かに対してのみであろう。」

馬を賣るきほひに出るすまふ哉

木曾路から近江路行は柳かな

なてしこの内またくゝるすまふ哉

【注】「なてしこの内またくゝるすまふ哉」。こゝの「なてしこ」は可愛い子供のこと。子供相手に相撲の眞似をしてゐるとき、體の小さい子供が親の内股を潜りぬける滑稽を叙したもの。但しかゝる場合の相撲を秋の季題として扱ふことは宜しくない。

吐逆して胸やくるしきねこの戀

【注】「吐逆して」。吐逆は「サクリ」と讀む。吃逆が正しい。訛つて「シヤツクリ」ともいふ。

きのふから雨を持たるやなぎかな

風筋を角に請行をしかかな

休む間は齒をみかきけり相僕とり

くれの鐘聞入もせず鳴かわつ
「やぶちゃん注…「かわつ」ママ。「蛙（かはづ）」。

講釋の座にうつむくや菊のはな

大木の榎の下や秋のくれ

組合て馬屋へ落るすまふかな

散る花に猪の身ふるひや杉の奥

櫓の木にかたむく月の寒^サかな

酒桶に聲のひきや蛭子講

髻結にあせのしみこむ暑さ哉

【注】「髻結に」。髻は「髻」正し。亂れたる髪、こゝにては「カミ」とのみ讀む。
「やぶちゃん注…「髻」の下部は「會」で、音は「カツ・ガチ・カイ・ケ」（現代仮名遣。ここでは以下同じ）で、訓は「たばねる・もとゆい」であるのに対し、「髻」の下部は「會」で、音「ソウ」で、訓は「みだれる」である。而して「髻結」で「かみゆひ」と讀むにしても、意味は結った髪が崩れ乱れてそれに汗が染み込むという風に讀まねばならぬのは、ちょっと不親切な表記だと感じる。」

御命講のしゆすにまつはる杓子かな

【注】「御命講のしゆすにまつはる杓子かな」。「しゆす」は「珠數」なり。手に珠數をかけて飯を盛る様子。

「やぶちゃん注…「杓子」は「しやくし（しゃくし）」で「杓子」に同じい。飯を盛ったり、汁などを掬ったりする道具。一般に飯用のものは「杓^{しやもじ}文字」というから、ここもそれで讀んでいるのかも知れない。」

炭の手て生にかゝるや水仙花

「やぶちゃん注…老婆心乍ら、「炭^{すみ}の手^てで生^いけにかかる^{すいせんくわ}や水仙花」と讀む。」

くれ合に硫黄^{カザ}の薰や窓の雪

出替りや笈さがされし門手形

「やぶちゃん注…「門手形」は「紋手形」で手の跡。」

海ちかし雪吹にふくむ松の音

簀卷から塩のしつくや春の雨

「やぶちゃん注…「塩」「鹽」の異体字。」

しめりたる伊勢の宮筥や春の雨

【注】「伊勢の宮筥」。「宮筥」は「ミヤゲ」と読む。土産のこと。「ミヤゲ」はもと「都筥」の略にて、都の苞苴といふ意たれば、伊勢参りの土産物を「宮筥」と書いたのである。

「やぶちゃん注…私は『柴田宵曲 俳諧隨筆 蕉門の人々 木導 二』で本句に注して、「土産」の『語源は、伊勢参宮に行けた人が郷里の人々へ伊勢神宮のお守りの入った小箱を持ち帰ったのがそれ、という説がある。ここは普通の何かの土産でもあろうか（無論、御札でもいい）、それが今降っている春雨というより、長い伊勢からの帰りの道中の湿り、その人の温もりとなって、貰った作者に感じられたというのであろう』と注した。別天樓の説と比べると、私の示した方が句解の深さをより増して呉れると思うが、如何であろう。」

繩帶を又引しめる寒サかな

永キ日や馬淵繩手の馬の聲

「やぶちゃん注…近江国蒲生郡馬淵繩手。現在の滋賀県近江八幡市馬淵町（ゲーグル・マツプ・データ。以下同じ）附近。日野川の右岸に当たる。因みに、サイト「袈裟匠 草戸庵」に「江州馬淵繩手御僧塚縁起」なるものが記されてある。関連する正円寺はここで馬淵繩手に近い。ここに記された話を木導が知っていたどうかは定かではないし、特にそれを指示する内容でもないが、ちょっと心打たれたので参考までに附しておく。」

入歯して若やぐ聲や鉢たゝき

「やぶちゃん注…江戸時代には主体が木製の入歯が作られ、普通に庶民も用いていた。それを専門職とした「入れ歯師」がいたのである。サイト「歯の博物館」のこちらによれば、『木床義歯の始まりは、木の仏像を彫る職人（仏師という）や能蔓師、根付職人などが彫ったといわれている。江戸期には仏像彫刻の注文が少なくなつたため、木彫技術を活かして入れ歯を彫る「入れ歯師」と呼ばれる専門職になっていった』。『木床義歯は、鎌倉時代に全国的に普及し、江戸時代には独特の技法が完成した』。『歯が欠けた場合には、その部分の木製の入れ歯（局部義歯という）をつくり、金属のバネを入れて隣の歯に引っかけて維持する現代のような方法も江戸時代に工夫されていた。また、前歯の裏に穴を開け、糸を帳して、隣の歯にしばって維持する方法もあった』とあり、画像も示されてある。」

初雪や紀伊國石に水藜蘆の實

「やぶちゃん注…「水藜蘆」万年青。单子葉植物綱キジカクシ目キジカクシ科スズラン亜科オモト属オモト *Rohdea japonica* のこと。」

立聞のうしみをみれば匏子かな

【注】「匏子」。「フクベ」と讀む。普通に瓢箪をいふ。

乾鰕カラザケてたゝき合けり年の市

【注】「乾鰕カラザケ」。乾鮭とも干鮭とも書く。鮭の腸を去りて、素乾にしたもの。

瞿麥ナテシコやちらりと馬の口の中

石屋から僧の出けり秋の暮

名月やすらりと高き松の上

假寝ウタに聲のにこりやおほろ月

「やぶちゃん注…ルビの「ゝ」はママ。カタカナであるから「ゝ」が正しい。他ではちゃんとそうなっているから、恐らくは植字工のミスで校正時にも誰も気づかなかったのであるう。」

五月雨や馬てつけ出ス馬の杳

青天に白熊の鏈ヘグマやむめのはな

【注】「青天に白熊ヘグマの鏈やむめのはな」。白熊は支那に産する犛牛の尾、白くして光澤あり槍兜などの飾りとする。又赤く染めたのを赤熊シヤグマといふ。

「やぶちゃん注…「犛牛」は「らいぎう」（らいぎゅう）と読む。ウシ目ウシ亜目ウシ科ウシ亜科ウシ属ヤク。野生種の学名は *Bos mutus* で、家畜化された種としての学名は *Bos grunniens* である。私の「和漢三才圖會卷第三十八 獸類 犛牛（らいぎう）（ヤク）」を参照されたい。」

けいせいの腹かけ涼しの色

寒たけも立かや炭のあきたはら

すつふりと杉はくれけりほとゝきす

ほとゝきす鳴や蹴あける鞠の上

元日や万代含む鷹の聲

五月雨やふり草臥し空のいろ

はらはらと青梅こほすあわせかな

皺の手に茶巾さはきの寒^サ哉

兼平の僧脇に出るかわすかな

「やぶちゃん注…「かわす」はママ。「蛙（かはづ）」。

日覆の魚見せ涼し鮎^{カサ}の薫

盗み行猫のなきたす袷かな

つはくらに辻で逢けり杜若

人相をまたから聞や田草とり

若竹にそそよ蟬の初音哉

蟬の音やするどにはるゝ空の色

大竹の藪ふきふせる野分かな

竹の子や嵐にしふく雨の中

紙虫ふるふ笈より出す袷かな

「やぶちゃん注…「紙虫」は「しみ」と読んでいよう。」

物おもふといきに散かけしのはな

ほつこりと和らく空のやなぎ哉

朝やけの空にそあかき渡り鳥

けいせいの守り袷や土用干

「やぶちゃん注…「袷」は「袋」の異体字。」

さらさらと舌のさゝけやねこの戀

打水ににきほふ門のまつりかな

去年から肉かゝりけりすまふとり

引しめる師の下帯や相撲とり

伏見から笑ふて歸^ル夏の月

山深く物々しくもかすみかな

出替りや涙ねふらすひぎの猫

初鮭や涅槃とり卷市の人

すさましや師走女房のわたほこり

支考西國へまかりし餞別

誹諧のうちわ射^{イデ}取る八嶋かな

かねは又いなふいなふと雲の峯

「やぶちゃん注…「いなふ」は「去なふ」で、「行け」と同時に「来い」の多層的意味であろう。」

小路よりもろこ焼かやはるの雨

「やぶちゃん注…「もろこ」は本導が彦根藩士であったことから、まず、琵琶湖固有種で「本諸子」或いは単に「諸子」と書く、日本産のコイ科 Cyprinidae の中でも特に美味とされ、炭火焼きが美味しい条鰭綱コイ目コイ科カマツカ亜科タモロコ属ホンモロコ *Gnathopogon caeruleus* のことと考えてよい。」

はたか身に疊のあとや夏座敷

乗合の舟のいきれや五月雨

青々とうずま^クく淵や散^ル紅葉

風呂屋から直^ニ見に行ほたるかな

撫子は色うすきほとあわれ也

「やぶちゃん注…「あわれ」はママ。」

夕立とはりあふて摺^ル芥子かな

世中をなかれ渡りのかわすかな

「やぶちゃん注…「かわす」ママ。「蛙（かわづ）」。

大儀の馬に馴たるちとりかな

出替りや小野小町も衣襖かな

「やぶちゃん注…「襖」は底本では上部の右手が、「埒」から「土」を除いた字形である。孰れにせよ、「装」の意であることは間違いない。」

火に酔ふてねこも出けり朧月

出女や水かゝみみるところてん

白罌粟や散かと思れは白き蝶

くれあひに荷ひつれけり稻の音

着ては又鉢木うたふかみこかな

「やぶちゃん注…「鉢木」は「はちのき」で謡曲のそれ。」

片道は日のくれになる枯野哉

すゝ拂や圍爐裏にくはる番椒

【注】「番椒」。「タウガラシ」と訓む。蕃椒正し。

荷ひ行羽帚うりや春の風

「やぶちゃん注…老婆心乍ら、中七は「はばうきうりや」（羽根箒賣りや）。」

白^{ホウツキ}齒に酸漿あかき禿かな

「やぶちゃん注…老婆心乍ら、「禿」は「かむろ」。当時、上級の遊女に仕えて見習いをした、六、七歳から十三、十四歳くらいまでの少女を指す。」

鞍すれの小荷駄ひき出す寒^サ哉

うくひすや味ふて鳴聲の色

出かわりやわきかの藥和中散

「やぶちゃん注…「出かわり」はママ。「和中散」当時、時候当たりや風邪などに効くとして諸国に流布した民間売薬の名称。枇杷葉・桂枝・辰砂・木香・甘草などを調合したもので、本家は近江国栗太郡梅木村（現在の滋賀県栗東市六地藏）で、江戸では大森に三軒、店を並べて売っていたと伝えられる（小学館「日本国語大辞典」に拠った。）」

上野にて

東西に鐘樓鼓樓や梅やなき

「やぶちゃん注…「鼓樓」は「こらう」（ころう）で、時を告げるための太鼓を打つための高殿。城郭や寺院に普通にあり、寺院の鐘とともに庶民の時報として近代まで地方では永く機能した。」

又時雨やり過したる月の色

ゆで物のしるで染るや春の雪

春もはやにがみのはしる路の臺

蝶の舞面箱持のかはつかな

【注】「蝶の舞面箱持のかはつかな」。蝶の舞は胡蝶の舞ともいひ、我國新製の舞曲、童子四人翼衣を負ひ、天冠に山吹を雙挿し、花枝を執て舞ふ。面箱は舞樂の假面を入るゝ箱なり。この句意は胡蝶は舞樂を演じ、面箱持の蛙は土に畏つてゐると滑稽的にいつたのである。「やぶちゃん注…「かはつ」は確かに別天樓の言うように「蛙（かはづ）」であるが、この場合、即物的に能樂の面の一種で、「善知鳥」^{うと}「阿漕」^{あしぎ}などに用いる面（[ブルーグル画像検索](#)「[能面蛙](#)」を見られたい）を、それこそ「表（面）」として諧謔していると解説しなければならぬと私は思う。私は謡曲には暗いが、能面にだけは、異様な執着がある。この別天樓の注は甚だ不満を私は持つ。」

山雀のふくべからはや冬こもり

「やぶちゃん注…「山雀」は「やまがら」でスズメスズメ亜目シジュウカラ科シジュウカラ属ヤマガラ *Parus varius*。「ふくべ」は瓢箪。」

油ぎるせなかやすへるすよふごり

鶯やきいたきいたとねこの戀

御命講に肩て風切^ルかみこかな

片手つく下女か酌にて新酒哉

音更^{クスキ}ル舉樹柱の紙衣かな

「やぶちゃん注」…「紙衣」は「かみこ」と読む。紙で作った衣服で、上質の厚く漉いた和紙に柿渋を塗って、何度も日に乾かし、夜露に晒し、揉みandraげたものを衣服に仕立てたもの。本来は律宗の僧侶が用いたとされ、古くは広く貴賤に用いられたが、近世になると、安価であるところから、貧者が愛用した。柿渋を塗らないものを白紙子^{しろかみこ}と称した。」

東風東むきたるひはりかな

陽炎や笠屋か門の笠のうへ

夕立やさらりと晴る芝の色

白魚に一塩するや春の雪

門松をやつとくゝるや福祿壽

初雪やなんてんの實の鳥の糞

梅か香やひいやりと夜の明わたる

名月に召や兩介はたけ山

【注】兩介は三浦介義澄と千葉介常胤、畠山は莊司次郎重忠のこと、共に頼朝部下の名將、觀月の宴に召されて左右に侍し、面目を施した倅、無論想像の時代詠である。

春雨や菊て詰たる長まくら

【注】「菊て詰たる」「菊て詰たる」の誤ならん。

「やぶちゃん注」…御覽の通り、本文は正しく「詰」となっている。植字工や校正係が気を使って勝手に直したものか。或いは校正時に編者（「開題」を書いた別天樓ではなく、校訂者であった安井小酒が直してしまった可能性も高い。因みに、私は、「柴田宵曲 俳諧隨筆 蕉門の人々 木導 二」で『菊枕^{きくまくら}である。十分に乾燥させた菊の花弁を詰め物に用いた枕で、晩秋の季題。菊は漢方で体の無駄な熱を冷ますとされ、また、中国古来より邪気を払って不老長寿を得ることが出来るものとして珍重され、重陽の節句では、丘に登って菊の花を浮かべた菊酒^{きくしゅ}を喫するのが習わしであった。秋に採取して天日で乾燥させた菊の花を詰め物代

わりに用いることから、上品な香りもある』と注した。因みに、菊枕と言えば、[「杉田久女菊枕」](#)の俳文を思い出す（リンク先は私の電子化注）。高濱虚子を憎むに至る以前の、久女の細やかな心遣いと才媛ぶりが窺われる名俳文である。未読の方は是非読みたい。」

榎木から下りてとりたる相撲かな

壺盧エフカホや火ともしてする馬のすそ

【注】「壺盧エフカホや火ともしてする馬のすそ」。「壺盧」は胡盧正し。「馬のすそ」は馬の四足を洗ふこと。

「やぶちゃん注」：「壺盧エフカホ」双子葉植物綱スミレ目ウリ科ユウガオ属ユウガオ変種ユウガオ *Lagenaria siceraria* var. *hispida* の別名。別天樓の注は間違っており、「壺盧」で正しい。「胡盧」の「盧」は庵や仮小屋の意である。「馬のすそ」は、「馬の裾をする」で、馬の足を洗ってやることを指す。」

こつそりと降出ス音や春の雨

破魔弓や竹馬乗て小笠懸

【注】「小笠懸」。騎射の式、綾藺笠を竿に掛けて射る、後世には藁を革にて包み的として馬に乗りて射る、素袍、烏帽子、行膝にて、臺目の矢を用いる。

「やぶちゃん注」：「破魔弓」で新年の句。幼い男の子が、小笹の竹馬に跨って、神社から賜った破魔弓で小笠懸（をがさがけ（おがさがけ）…四寸（約十二センチメートル）四方の小さな的を馬上から射る馬上弓術の競技。鎌倉時代に盛んに行われた）の真似をしているのである。「素袍」は歴史的仮名遣は二種あり、「すはう／すあう」（すおう）で、直垂ひたれの一種。裏のない布製を特色として、「素襖の直垂」といい、菊綴きくどじや胸紐に革を用いて「革緒の直垂」ともいう。本来は略儀用で、室町頃には庶民も日常的に着用した。江戸時代に形式化して長袴が普通となり、侍烏帽子に熨斗目小袖を併用し、儀礼の時の平土ひらさむらいや陪臣の式服となった。「行膝」は「むかばき」で、遠めの外出や旅行・狩猟の際に両足を保護する覆いとした布帛ふはくや毛皮の類。中世の武士は騎馬遠行の必需品とし、鹿の皮を正式として腰から足先までを覆う長いものを着用した。現在も流鏑馬やぶさめの装束として使用される。「臺目」は「ひきめ」で、「臺目の矢」とは、鏃やどりではなく、鈍体を装着した突き刺すのではなく、対象に強い圧力・打撲を与える矢を指す。邪鬼を払う呪力を有するともされた。」

女中客うけたる音の柳かな

湯あかりに歩みよりたる柳哉

かゆそうに羽せゝる鶏や春の雨

「やぶちゃん注」：「そうに」はママ。」

うつり香の腕にのこるやはるの雨

茶の友や法の友よふ庭の菊

「やぶちゃん注…「法の友」の「法」は「のり」。ともに仏道を志している友の意。」

雨晴てくつろくそらの柳かな

菊の香や持古したる杖の色

出替りにかわるや髪のゆひこゝろ

鐵拐は口から引やいかのほり

「やぶちゃん注…「鐵拐」中国の代表的な仙人である「八仙」の一人で、屍解仙（しかいせん一度、人として死んだ後、蟬脱ぜんだつする如くにして仙人になる羽化登仙法の法）で頓に知られる李鉄拐（てつかい。彼を描いた風（大口を開けた彼が下方に描かれているのであるう）が揚げられている正月の景だろうが、句背に實際の鐵拐が口から風糸を吐き出して風を揚げている景色が被る。或いは、上手く出来ぬ子の風揚げに手本を見せている杖を突いた老人が実景中であって、それをかくカリカチャライズしたともとれる。」

蚊遣して馬待宿のあつさ哉

大竹の間々や山さくら

鶯や其時判官むめのはな

「やぶちゃん注…「判官」源義経。時代詠。浄瑠璃・歌舞伎の「一谷嫩軍記」や「義経千本桜」を想起するが、残念ながら、この二大外題は孰れも木導の死後の作品である。凡そ「平家物語」や「義経記」を元にするか。」

青天に障子も青し軒の梅

三味線の皮とも成かねこの戀

鶯やすつとのひたる梅の枝

馬のかゆ砂かむ音の寒サかな

白無垢に手拭帯やおほろ月

ふみ分^ル蒲^{ガマ}の脛^{ハ、キ}巾^{ハ、キ}や下もみち

【注】「ふみ分る蒲の脛巾や下もみち」。脛巾に脛穿^{ハギバキ}の略、脛に絡ふ脚絆のこと。蒲で作った脛巾を着て、紅葉林中を徘徊する状、鷹狩などの場合たらん。

「やぶちゃん注…注の上五の「る」はママ。「脛巾」（はばき）は、足の脛に防寒・防護のために巻いた、後世の脚絆^{きやはん}に相当する物のこと。」

扇子賣^ル兄か跡から團扇うり

行灯て水菜そろゆる冬夜哉

馬の腹くゝつて出るほたるかな

冬瓜の市もくつるゝ時雨かな

噴鼻^{クツサメ}の顔はつかしき柳かな

菜の花の上吹風のやなきかな

落葉たく煙も薄し雪の門

枯尾花まじる小柴のさむさ哉

晝顔に馬の蹄のほこりかな

打綿にあられ降り込師走哉

麥地ほる田土のかざや神無月

くれあひに飛脚着けり水仙花

俗戸の押繪にかくや水せん花

餅の手をたゝいて出るや衣配り

「やぶちゃん注…座五は「きぬくばり」と読み、年末に正月の晴れ着用として一門の人々や使用人などに衣服を与えた行事を指す。」

蠟燭に鷹のまなこの光り哉

どんみりと星くもる夜の蛙かな

うくひすの聲すへりたる柳哉

爪の跡車の榻やねこの戀

【注】「爪の跡車の榻やねこの戀」。榻は「シヂ」と訓む。車の轆を載せる臺。又車に乗る時の踏臺。

「やぶちゃん注」…「轆」は「ながえ」と読む。「長柄」の意で、馬車・牛車ぎっしゃなどの前方に左右に長く突き出ている二本の棒。先端に軛くびきを渡して牛や馬に牽かせる具。」

鶯の聲の下から朝日かな

煤拂や手を指シ延ス羅生門

【注】「煤掃や手を指し延す羅生門」。謠曲羅生門に、羅生門に住める鬼、渡邊の綱の後より、兜の鉦をつかんで引き留めたる折のやうに、縦横に手を延して煤掃をしてゐる光景。

「やぶちゃん注」…注の「し」「す」はママ。「鉦」は「しころ」で、「鉦」とも書き、兜の鉢の左右・後方に附けて垂らし、首から襟の防御とする武具。多くは革製の札さね又は鉄板を三段乃至は五段下りとして緘おとし附ける。」

椴の木に疊の音やすゝはらひ

八の卷いたゝき合ス頭巾かな

【注】「八の卷いたゝき合す頭巾かな」。法華經八卷の經文を頂きあふことか。
「やぶちゃん注」…注の「す」はママ。」

朝日より夕日に赤し峯の雪

崩ス碁の音ふけにけり冬の月

うつくしう封する文や春の雨

黒雲にをつ立らるゝ衛かな

「やぶちゃん注」…「衛」は「ちどり」。千鳥。チドリ目チドリ亜目チドリ科 Charadriidae に属する種の総称（チドリという種は存在しない）。本邦では十二種が観察され、その内の五種が繁殖する。博物誌は私の「[和漢三才圖會第四十一](#)」[水禽類](#) 鴝（ちどり）を参照された。これは琵琶湖の景であろう。」

すゝ掃や宵から白をこかし出ス

声高に大津次郎や大根引

「やぶちゃん注…座五は「だいこびき」。「大津次郎」は「義経記」に出る義経東北行に纏わる義経の逃走を助けた商人。一行を捕らえんと待ち構えていた領主山科左衛門を謀^{たばか}って、琵琶湖北岸の海津まで船で一行を送り届けた。しかし、「大根引」を持ち出した意味が良く判らぬ。大津二郎の妻が性悪女として出るから、それと関係があるかとも思ったが、やはり判らぬ。識者の御教授を乞う。」

節季候や辻で落合ふ四人連^レ

「やぶちゃん注…「節季候」は「せきざろ」と読む。「節季^{せつき}にて候ふ」の意。江戸時代の門付芸の一つ。歳末に三、四人一組で裏白（シダ植物門シダ綱ウラボリ目ウラボリ科 Gleicheniaceae）の葉をつけた笠をかぶり、赤い布で顔を覆い、四つ竹などを鳴らしながら「せきざろ、せきざろ」と囃しては家々を回り、米銭^{まいせん}を請うた。冬の季題。」

ねむたがる顔を撫けり眞桑瓜

二千里の潟かゝへる千鳥かな

【注】「二千里の瀉」瀉は潟の誤。

「やぶちゃん注…御覧の通り、本文は正しく「潟」である。前の通りの仕儀が行われてしまったものであろう。」

寝静る小鳥の上や後の月

「やぶちゃん注…「後の月」は「のちのつき」で、陰暦八月十五日の夜の月を「初名月」というのに対し、その後の九月十三日の夜の名月を指し、「十三夜」「豆名月」「栗名月」の名でも知られる。秋の季題。」

白菊やはれたる空に四十雀

鉞^{まさかり}の白き刃にもみちな

日のひかりあほひのまへか猫の戀

【注】「目のひかりあほひのまへか猫の戀」。葵の前は高倉帝の寵を受けし女、後に帝世を憚り給ひて召されざりしかば、葵の前憂きに沈みて身まかりしこと平家物語卷六に見ゆ。

うくひすや手挾て聞クすゝめ弓

「やぶちゃん注…「すゝめ弓」は「すずめゆみ」で「雀弓」。遊戯用の小さい弓で楊弓の類い。

また、子供の遊ぶ小さな弓のこと。後者でとる。俄然、少年の姿が画面に直に浮かぶからである。」

冬枯の草かく馬のさむさ哉

送り火の消たる跡や松に風

曝板シヤレの額サレイタのさむさよ鷓鴣ミンサザイ

【注】「曝板」。曝板の訛、長く風雨に當りて朽ち壞れた板にて造りたる額。

「やぶちゃん注」・「曝」の字は本文も注も孰れも「曝」の「暴」の下半分が「恭」の字となつた異体字であるが、表記出来ないので「曝」とした。「鷓鴣」はスズメ目ミソサザイ科ミソサザイ属ミソサザイ *Troglodytes troglodytes*。私の「[和漢三才圖會第四十二 原禽類 巧婦鳥（みそざざい）（ミソサザイ）](#)」を参照されたい。鳴き声もリンクしてある。」

柴の戸を徒跣ハダシて明ルきくの支

くれなひの鷹の大緒や玉あられ

【注】「くれなゐの鷹の大緒や玉あられ」。鷹狩に使ふ鷹をつなげる紅き緒のこと。

「やぶちゃん注」・「くれなひ」はママ。注が正しく「くれなゐ」に直してあるのはママ。「大緒」は「おほを」（おおお）と読む。」

風の音松に渡する柳かな

赤土て落書するやうちわ賣

わやわやと人足宿や五月雨

大津松本翁の墓へはじめて詣ぬる折から

墓の道間はや辻のうちわ賣

こんとなる鐘の跡から衛かな

木からしや田より田に行水の音

行騰をぬいて取たる角力哉

【注】「行騰」。「ムカバキ」と讀む。行騰正し。鹿、熊、虎等の毛皮を用ひ、長さ三尺六寸、腰に着けて兩股の前面を被ふもの、騎馬に用ひる。

「やぶちゃん注」・「行騰」既に私が注した。なお、別天樓は「行騰」を誤りのように注して

いるが、こうも書くので誤りではない。」

其角あつまへ旅立ける餞別

氷りふむ音もせはしき別れ哉

御命講の餅のつよさよ法の力

「やぶちゃん注…御命講の句が多いので、木導は日蓮宗の信徒であったと考えてよからう。座五は「のりのりき」と読んでおく。」

小原よりかゝゆる下女かうつきぬた

胸の毛に麥の粉白しすまふとり

梅の影ふみ折る音か薄こほり

「やぶちゃん注…私は本句に、視覚と聴覚の絶妙なりアリズムと、非常に新鮮なオリジナリティを感じる。」

談合の膝打たゝく紙衣かな

能因は槇の雫のかみこかな

「やぶちゃん注…中七は「まきのしづくや」。歌人能因（永延二（九八八）年？）は藤原長能^{ながよし}に学び、陸奥・甲斐・伊予などを旅して歌作した行脚の人。大江嘉言^{よしとき}・源道濟^{みちなり}らと交遊し、「賀陽院水閣歌合」・「内裏歌合」などにも参加した中古三十六歌仙の一人。「後拾遺和歌集」などに入集。俗名は橘永愷^{たちじなのながやす}。通称は古曾部入道。この一句は「新古今和歌集」の能因法師の一首（五七七番）、

十月ばかり、常磐^{ときば}の杜^{もり}をすぐとて

時雨^{しぐれ}の雨染めかねてけり山城のときはの杜のまきの下葉^{したば}は
をインスパイアしたものである。」

燕の下はらさはる早苗かな

撫子とくなくつき合ふや百合の花

【注】「撫子とくなくつき合ふや百合の花」。原本「くなくつき」とあれど、「うなくつき」の誤。

養父入に道一筋の焼野かな

「やぶちゃん注…「養父入」は「やぶいり」で「藪入り」のこと。草深い田舎に帰るという意から、正月と盆の十六日前後に、奉公人が主人から休暇を貰って親元などに帰ること、又、その時期を言う。中でも特に正月のものを指し、盆のものは「後の藪入り^{のち}」とも称した。「宿^{やど}

下がり」とも言った。俳諧では新年の季題とする。」

口切やみなみは時雨北は雪

「やぶちゃん注…「口切」は「くちぎり」で、陰暦十月の初め頃、夏から封じておいた新茶の壺を初めて開けること、或いは、その茶で催す茶会を言う。冬の季題。」

待宵に留主遣ひけり暮友達

「やぶちゃん注…「待宵」は「まつよひ」で、翌日の十五夜の月を待つ宵の意から、陰暦八月十四日の夜、「小望月」こもちづきを指す。秋の季題。」

闇の夜になの花の香や春の風

子を持て遊女に見せる燕かな

若竹に聲しなひけり子規

「やぶちゃん注…「しなひけり」は「撓しなひけり」で、「若竹」の、しなやかに撓たわんで、美しい曲線を描いているさまに、あたかも、逆らうことなく従って寄り添う（「しなふ」にはその意もある）かのように嬬たおやかな聲でホトトギスが鳴いているというのであろう。」

南天に行あたりたるかみこ哉

うくひすやまん丸に出る聲の色

まだ空は鴨の羽音のやなきかな

燕脂べニの物縫ふた目で見る柳哉

「やぶちゃん注…柴田宵曲は「俳諧随筆 蕉門の人々 木導 二」でこの句を挙げて、『玉まつり』には上五字が「あかい物」となっている。紅い物を縫って疲れた眼を窓外に遣ると、そこには青い柳が春風に枝を垂れている。紅い色を見詰めたあとの眼は、ただ虚空に遊ばせても反対色の緑が浮ぶのであるが、その眼を移す柳の色は特に和やかな感じを与えるに相違ない』という、木導の持つ視覚的な特質をよく評釈している。」

うくひすや十分に鳴聲の色

夜の内に一雨したるやなきかな

よむ文を嚙て捨てけり朧月

うしほ湯に今日も入ばや春の雨

あたらしさ暦のかざや春の雨

芦に渠^ル達磨に似たる蛙かな

【注】「芦に乗る達磨に似たる蛙かな」。達磨三朝傳に「菩提達磨尊者降^ニ生于南印度國^一。姓刹帝利。初名菩提多羅、亦號^ニ達磨多羅^一。……達磨與^ニ武帝^一知^ニ其機縁不^レ契、潜折^ニ葦一枝^一渡^ニ揚子江^一而去^レ梁北趨^ニ魏境^一」。とあり。葦に乗るとは小舟に乗る形容。されど誤つて葦一葉に乗りたる達磨を描くに至つた。

「やぶちゃん注」注の「る」はママ。「達磨三朝傳」は正しくは「初祖菩提達磨三朝傳」（全三卷・附一卷）で江戸末期に釈泰嵩なる人物が書いた達磨大師（？～五二八年）の伝記。漢文部を勝手流で訓読すると、「菩提達磨尊者は生^{シヤウ}するに南印度に降^{ガウ}す。姓は刹帝利。初名は菩提多羅、亦、達磨多羅と號す。」「達磨、武帝と其の機縁の契^{ケイ}せざるを知り、潜^{ヒソ}かに葦の一枝を折り、揚子江を渡り、梁を去りて、北は魏^ギの境に趨^{オモム}く。」か。「刹帝利」インドのバルナ（四種姓）の一つである「クシャトリヤ」のことで、バラモンに次ぐ第二位の身分であり、王族及び武人階級であつた。「武帝」は南朝の梁の高祖武皇帝蕭衍（在位五〇二年～五四九年）。なお達磨は達摩の方が古形で、正しい表記のようである。」

數の子に布泉の錢の祝ひ哉

【注】「布泉の錢」。布泉は金錢のこと、泉布ともいふ。

「やぶちゃん注」「布泉」は元来は南北朝時代の北周で鑄造された古錢を指すようだが、句意が私にはよく判らぬ。」

塩豆て奈良の與助か月見哉

「やぶちゃん注」「塩」既に示した通り、「鹽^{シホ}」の異体字であるが、ここでは（つくり）の右上の部分が「鹵」となった異体字であるが、表記出来ないもので、先に使用されていたこれに代えた。思うに、本来に原写本がそうなっていたか、ちよつと疑問である。印刷所が「塩」の正字異体字を幾つか持っているものを、いい加減に使い回している可能性が疑われるからである。「奈良の與助」は不詳。一人、江戸時代に著名だった奈良の与助に、山村与助（？寛永一七（一六四〇）年～初代。名は正寛）なる大工はいる。徳川家康の伏見在城中に御大工となり、諸職人支配を許され。元和二（一六一六）年に大坂に移住し、大坂城の再建などに当たつた。上方筋の瓦御用を支配した寺島藤右衛門と、新田開発・船運送業・寒天製造の独占などで知られる尼崎又右衛門とともに大阪城御用として「大坂三町人」と呼ばれた。以後。代々が「與助」を称している。但し、これがこの句の「與助」かどうかは判らぬ。」

白雨や水のいりたる貝の音

「やぶちゃん注」「白雨」ここは「ゆふだち」と読む。夕立ち。「白」は明るい空から降ることと由来し、これで別に「にわかあめ」（俄か雨）とも読む。」

團扇賣^ル子をはねさせて蚊遣哉

鴨や餌指の笠に散る椿

「やぶちゃん注…「鴨」はヒヨドリ。「餌指」は「ゑさし」或いは「ゑざし」で「餌刺」「餌差」とも書き、ここは鷹の餌にする小鳥をもちぎわ繯竿で刺して捕えるのを生業とする人を指す。」

杜宇ちからになるか峰の月

「やぶちゃん注…「杜宇」は「ほととぎす」と読む。中国古代の伝承である古蜀の王望帝杜宇が死んで靈魂となり、その霊が化身となったのがホトトギスで、だから、蜀が秦によって滅ぼされてしまったことを知って嘆き悲しみ、「不如歸去」（歸り去くにしかず…何よりも帰るのが一番いい）と鳴きながら、血を吐くまで鳴いた、だから、ホトトギスの口の中は赤いという、伝承からの芋蔓式にホトトギスの異名は誕生している。」

干鮭に喰さかれたる帍子かな

「やぶちゃん注…「帍子」は「かみこ」。「帍」は「紙」の異体字。」

此咄^シ伏見て聞そ勝すまふ

「やぶちゃん注…中七は「ふしみできくぞ」。」

松本と膳所の間やいかのほり

あいらしく縫上^ケしたる袷かな

炉ひらきやませあわせ着^ク炭の舟

「やぶちゃん注…「あわせ」はママ。」

荷物とく奈良のうちわや時鳥

ニッニッ石あいしらふすゝきかな

「やぶちゃん注…「あいしらふ」はママ。「あひしらふ」が正しく、ここは「程よく取り合わせる」ことを言う。」

長範は人見の松で月見かな

【注】「長範は人見の松で月見かな」。熊阪長範といふ強盗。美濃國赤阪の宿で牛若丸に斬殺されたこと、謡曲烏帽子折及熊阪に見ゆ。人見の松のことは「諸國里人談」に「美濃國垂井と赤坂の間、青野原に熊阪が物見の松あり。相傳ふむかし長範此松のうへに潜まりて、往來の人をうかゞひしといへり。熊阪は越後國關川と小田切との間に熊坂村といふあり。此の所の

出生なりといふ。

「やぶちゃん注…「熊阪長範」と別天樓は記すが、一般には熊坂長範である。義経伝説のトリック・スターとして登場したもので、私は実在は疑わしいと考えている。別天樓の引く「諸國里人談」は俳人で作家の菊岡沾涼せんりょうが寛保三（一七四三）年に刊行した怪奇談への傾きが有意に感ぜられる百七十余話から成る俗話集であるが、私はブログ・カテゴリ「怪奇談集」でその全篇を電子化注している。当該条は「諸國里人談卷之四 物見松」である。そこで同定しているが、彼が襲う相手を物色したとされる、その松は、現在の岐阜県不破郡垂井町綾戸あやの綾戸古墳（[ここ](#)）（グーグル・マップ・データ）で「長範物見の松」として比定されている。[手水舎氏のサイト「寺さんの川柳&ウォーク」](#)の「綾戸古墳と長範物見の松」には写真もある。」

姿見に顔とならふや菊の影

信樂の摺鉢荷ふかれ野かな

咄シさへうちしめりけり五月雨

明月や香爐の獅子の口の上

尻目シメ縄や杉より渡る風の音

「やぶちゃん注…「尻目シメ縄」は注連縄しめなはの意でよからう。この注連縄は御神木しんさんの神杉しんさんたるところのその杉そのものに掛け渡してあるととるべきであろう。」

鹿に紅葉といふ題をとりて

さほしかの寝あたまめたる紅葉哉

「やぶちゃん注…「さほしか」はママ。「小男鹿」であるから「さをしか」が正しい（「さを」は美称の接頭辞）。」

眞黒な蝶も飛けり白牡丹

小夜更て椎炒ル音や冬こもり

雲雀をはけあけて鳴か雉子の聲

「やぶちゃん注…一句は「雲雀ひばりをば蹴上げて鳴くか雉子の聲」である。」

ひいやりと顔あらはゝや秋の暮

「やぶちゃん注…「ひいやりと」はママ。当時の口語表現。」

天高しきりんどうにたまり水

「やぶちゃん注」：「きりりんどう」「笹竜胆」リンドウの別名。葉の形が笹に似ていることに由来する。」

炭せよと袖ひき立る紙子かな

白水にうきしつみたる落葉哉

「やぶちゃん注」：「白水」は「はくすい」で透明な水の流れの意。」

しやうとけの帶引しめて砧かな

「やぶちゃん注」：「しやうとけ」不詳。しかし、調べる内に、これは「しやらどけ」の判読の誤りではないかと思ひ出した。「しやら解け」というのは「結んだ帯や紐が自然に緩んで解けえししまうことを言い、「しやら解け」とも言う。「ら」と「う」の崩し字は判読を誤り易い。意味もそれで腑に落ちる。」

こそくりて奪ひ取りかきつはた

短檠て見送る客や庭の菊

【注】「短檠」。「タンケイ」燈臺の短くして低きもの。

寒さうに寒菊生て冬こもり

夕立に涼しく成やむねの中

十種香の客もそろふや春の雨

【注】「十種香」。「ジシユカウ」いふ。梅檀、沈木、蘇合、薰陸、鬱金、白膠、青木、零陵、甘松、鶏舌の十香なり。十炷香とも書く。

「やぶちゃん注」：音読みは「じつしゆかう」（じつしゆこう）とも。別天樓の「沈木」は「沈水」の誤りで、それぞれ（面倒なので総て現代仮名遣で読みを示す）、梅檀・沈木・蘇合・薰陸・鬱金・白膠・青木・零陵・甘松・鶏舌で、梅檀は白檀（ビヤクダン目ビヤクダン科ビヤクダン属ビヤクダン *Santalum album*。ムクロジ目センダン科センダン属センダン *Melia azedarach* ではないので注意が必要）。「沈水」は狭義には香木として有名な沈香類（例えば、アオイ目ジンチョウゲ科ジンコウ属アキラリア・アガローチャ *Aquilaria agallocha* など、複数種ある）で、別名を「伽羅」と呼ぶ。「蘇合」は十六世紀まではトルコ近辺に産するツツジ目エゴノキ科 *Stryacaceae* の植物 *Stryax officinal* から得られる樹脂のことを指していたが、その後、同じようにトルコ近辺に産する、品質上、類似したより安価な、ユキノシタ目マンサク科 *Hamamelidaceae* の植物 *Liquidamber orientalis*（モミジバフウ・アメリカカフウ等と呼ばれる）にあって代わられた。「薰陸」はインドやアフガニスタンに産するムクロジ目ウ

ルシ科 *Anacardiaceae* のクンロクコウ *Boswellia carterii* の樹脂と考えられている。「鬱金」はご存知、ターメリック (turmeric: 単子葉植物綱シヨウガ目シヨウガ科ウコン属ウコン *Curcuma longa*)。「白膠」はウルシ科ヌルデ属ヌルデ変種ヌルデ *Rhus javanica* var. *chinensis* の実。「青木」は「しょうぼう」とも読み、コシヨウ目ウマノスズクサ科 *Aristolochiaceae* の植物の根とされ、古く正倉院にも収められていたという。「零陵」は「零陵」とも書き、サクラソウ科 *Primulaceae* のモロコシソウ *Lysimachia sikokiana* の地上部の全草を乾燥したもので「薫草」とも呼ぶ。「甘松」はネパール・ブータンなどのヒマラヤ山系及び中国の山岳地帯を原産とするオミナエシ科 *Valerianaceae* の多年生草本ナルドスタチス・チネンシス *Nardostachys chinensis* の根及び茎に由来する。「鶏舌」は専らクローブ (Clove) の名で知られるフトモモ目フトモモ科フトモモ属チョウジノキ *Syzygium aromaticum* の花蕾である。一言申し上げておくと、私は好き好んでこんな詳細注を附しているのではない。今までの注の附け方のやり方を自身に定めた以上は、最低、ここに示したような内容を注さなければ、他の注とのバランスが保てないからである。私自身が後々まで気持ち悪く感じなければならぬからである。」

すらすらと松のみとりや花曇り

菜の花の影やうつろふ海のへり

ねこの子やきよつと驚く初眞桑

あれも折これも折はや菊の花

一朶は袖てかくすや菊のはな

「やぶちゃん注…「一朶」は「ひとえだ」と読む。「朶」(音「ダ」)は助数詞で、枝に附いている花房を数えるのに用いる。」

翁身まかり給ふ比其角へ遣ス

身をもたへ獅子のあかきや多牡丹

行春のいさ笠杖をかくさばや

夕かほの事おもひ出ス門の雪

【注】「夕かほの事おもひ出ス門の雪」。源氏物語にある夕顔といふ女のこと。

「やぶちゃん注…と言っても、この句は光源氏に成り代わった時代詠ではない。実景の雪の白さから木導自身が夕顔の花を連想し、その雪の儚さから、「源氏物語」の「夕顔」の帖の幸薄い彼女のことを想起したというのである。」

涅槃會や夕日残れる場の松

右ねはんの句支考か曰一とせ加賀万子亭にて越中

越後佐渡其外翁門弟會合の節翁門人の句の内高上

至極の句を吟味候得は木導かねはんそと何もかん

し入候由物かたり也

【注】「場の松」。ニハノマツ。

「加賀萬子亭」。萬子は金澤藩士、生駒氏、名は重任。此君庵の別號あり。享保四年歿す。
「やぶちゃん注」前書を読み易く書き直しておく。一部に助詞や送り仮名を補った。

*

右、「涅槃」の句、支考が曰はく、「一とせ、加賀万子亭にて越中・越後・佐渡、其外、翁が門弟の會合の節、翁、『門人の句の内、高上至極の句を吟味候得ば、木導が「涅槃」ぞ』と。何も感じ入り候ふ」由、物がたりなり。

*

「万子」生駒万子（いこまんし 承応三（一六五四）年～享保四（一七一九）年）は加賀藩士（禄高一千石）で俳人。本名は重信。生駒直勝の二男生駒八郎右衛門の嫡男として金沢に生まれた。当初は談林派に学んだという。「万子」の号での史料上の初見は、貞享二（一六八五）年の撰集「稻筵」（貞享二（一六八五）年刊。鈴木青風編。読みは「いなむしろ」か）で、貞享四（一六八七）年の江左尚白編「孤松」に、かの小杉一笑らとともに入集している。元禄二（一六八九）年七月中旬の松尾芭蕉の加賀来訪の際に入門した。山口素堂谷木因とともに芭蕉の三友と言われた。立花北枝・秋の坊らと交遊し、秋の坊が「寒ければ山より下を飛ぶ雁に物うちになふ人ぞ戀しき」との歌を詠んで無心をする、「寒ければ山より下を飛ぶ雁に物うちになふ人こそやれ」と返歌して炭を贈るなど、経済面で俳友を助けたという。越中蕉門の御大である井波の浪化とは姻戚でもあり、親しく交わった。また、各務支考の庇護者でもあった。編著に浪化・支考との共編の「その花」や、遺稿となった「金蘭集」がある（以上は概ねウイキの「生駒万子」に拠った）。但し、この「奥の細道」の芭蕉の金沢滞在時に万子亭に於いて「越中・越後・佐渡、其外、翁が門弟の會合」があったという事実は確認出来ない。しかし、金沢を立った芭蕉と曾良をこの万生駒万兵衛が追いかけたという事実が生駒自身の日記から判っている（一九九四年講談社刊山僧「芭蕉 奥の細道事典」に拠る）。仕事の都合上、見送りが出来なかったため、勤めを終えてから追い掛けたのであった。彼は『白い絹の袷と金子三両を餞別として差し出したが、芭蕉は受け取りをかくさないに拒否している』（前掲書）とある。そもそも一笑追善の法会が最も大きな会合で、そこではかの芭蕉の絶唱も披露された（私の『今日のシンクロナティ「奥の細道」の旅 65 金沢 塚も動け我が泣く聲は秋の風』を参照されたい）が、こんな大規模な加越と佐渡の蕉門の集まりがあれば、曾良の日記に出ないはずもなく（「曾良随行日記」にもそのような記載はない）、正直、私はこの支考の言は信用出来ないのである。生駒自身の日記を是非とも読みたいものである。」

「やぶちゃん注…以下、木導の歌仙独吟であるが、私は必ずしもその総ての句意を理解出来はしない。しかし、これは一連の彼の詩想であるからには、途中に注を附すことを憚れるので、以下、本歌仙に就ては読みにくいという謗りを受けると思うが、注は別天樓のそれと合わせて最後に纏めて置いた（別天樓の注自体に対する問題点がある場合は、彼の注の中に挿入してある）。なお、六句目の「序」（読みは「じよ」であろう）の字には明白な右傍線が施されており（植字組版のスレとは思われない）、その意味は私には判らぬが（ここは連句の表（初表）の折端に当たるからそれを指示するものかも知れぬが、こんなことをするのかどうか、私にはよく判らぬ）、再現しておいた。各句間はやはり一行空けた。」

歌仙獨吟

すごすごと暮かゝけり枯尾花

巧婦鳥鳴ミツサ、イク石橋の下

此鹿毛は少と跡足の早くして

軒につり柿みせは木さはし

みかきこむ茶釜に月の横にさす

秋中に序リがやつとすむへし

風呂敷のやれさるやうに封をきるウ

あすの節句は大坂てせん

青々と植わたす田のさわやかに

古かね買ふて手を煤にする

五六足女のあしたぬさちらし

瘡の熱て鳶のひもとく

ねんばりとつやからちがふ早稲の餅

踊た聲を隠す口上

くわたひしと持つ棚經の挾箱

瓦の棟に月のすみきる

咲^ク花は瀧のしぶきにうちぬれて

足の下から雉子の鳴たつ

^名うつくしう此出替に隙をとる

紋うるみたるはり直しもの

裏町は片側斗祭りにて

生たるやうにふれる生鯛

昨日今日ほんの天氣に風かわる

大竹屋より小竹屋の月

振袖を引する程の秋あわせ

提たる菊に蝶の追つく

乗物へ揚弓入て下屋しき

さつと降たる雪に帚目

あかきれば足に豎横十文字

八つ時なるか鶏の聲々

^{名ウ}開^キ戸をひらけはとつと手習子

又ふくろひる兩の袖口

虱より蚤にあきたる木曾の旅

越前簀に着たる加賀笠

うつすりと花の中より虹立て

埃吹^{ゴキ}かける菫蒲公

【注】「木さはし」。木のまゝに熟せしめて澁味を抜きたる柿のこと。

「瘡」。古名「ワラハヤミ」といふ病氣。「オコリ」ともいひ音にて「ギヤク」ともいふ。隔日に時を定めて發熱する病。

「やぶちゃん注…マラリアのこと。」

「虱」。蝨^{シラミ}宜し「シラミ」と讀む。

「やぶちゃん注…「宜し」は「よろし」か。副詞で本来は今も使う、上の内容を受けて「いかにもそれらしく」の意を表わす語だが、これは別天樓の口癖で、「と同じ」の意かと思う。」

「蒲公」。蒲公英宜し「タンポ、」といふ。

「やぶちゃん注…「此鹿毛は少と跡足の早くして」は「このかげは／ちと／あとあしの／はやくして」か。

「踊た聲を隠す口上」の上五は「おどつたこゑを」。

「くわたひしと持つ棚經の挾箱」上五は「桑畑」で桑畑、座五の「棚經」は「たなぎやう」で、盂蘭盆会に檀家に請われて、僧侶が仏壇や精霊棚の前で読経し、祖先の霊を祀ることを指す。この「挾箱」^{はさみばこ}（近世、主に武家の公用の外出に際して必要な調度・装身具を納めて従者に担がせた箱。長方形の浅い肩幅ほどの大きさで、蓋に棒を通して担いだ）は従僧か下男が列の最後に背負っているその式に必要な經典・仏具を入れたものであろう。それが桑の列の頭から坊主らの頭部の最後尾に、一際、突き出て見えている景と讀んだ。

「振袖を引する程の秋あわせ」「あわせ」はママ。「秋袷」で歴史的仮名遣は「あきあはせ」が正しい。秋の冷え始めから着る袷のこと、通常は秋らしく落ち着いた柄や色合いのものが用いられるが、ここはしかし、「振袖を引する程」にかなり派手めなのか。よく判らぬ。」

「乗物へ揚弓入て下屋しき」「揚弓」は「楊弓」で「ようきゆう」（ようきゅう）、遊戲用の小さな弓（約八十五センチの弓に約二十七センチの矢を番え、座って射る。江戸時代から明治にかけて民間で大人の賭博的遊戲として流行した。もと楊柳で作られたことから、この名がある。但し、幾つかの記載を読むと、「揚」では誤字ではなく（というより誤字が一部で慣用化されたか）、実際に「揚弓」と書いたケースが複数あるようだ。

「八つ時なるか鶏の聲々」「八つ時」は^{あかつき}暁八ツで御前二時頃から午前四時頃で早過ぎるから句になる。

「開^キ戸をひらはけとつと手習子」扉の様子から寺子屋の景であろう。

「又ふくろひる兩の袖口」「ふくろびる」で「綻^{ほころ}びる」に同じい。

「越前簀に着たる加賀笠」「越前簀」はどんな蓑か判らぬが、「加賀笠」は「かががさ」で加

賀国で産した加賀菅笠で、町家の女房や比丘尼などが外出時に用いたから、映像対象が女であることが判る。加賀笠とは櫨の板を薄く鉋で引いて編んだもので、色が白く、糸縫いが細かくしてあり、恰好がよく、上物とされた。天和（一六八一年～一六八四年）頃に始まり、貞享・元禄（一六八四年～一七〇四年）頃、流行した。傘の頂きの部分が有意に突き出ている。[ブルーグル画像検索「加賀笠」](#)をリンクさせておく。

以下は、発句の追加分の体である。」

三千の官女ならへて月見かな

山臥の門いかめしや門かさり

「やぶちゃん注…「山臥」山伏。」

鶯のにらみの介やみそさゞい

【注】「鶯のにらみの介やみそさゞい」。鶯が鷓鴣を睨み下してゐるのを、かく狂じたものか。竹齋物語に竹齋といふ醫師が、にらみの介といふ下僕を従へて諸國を遍歴したことを記せり。この書は元禄の頃弄ばれたものなれば、その趣向を用ひて、鷓鴣は鶯の召使なりとの意か。

「やぶちゃん注…「竹齋物語」江戸初期の仮名草子「竹齋」。[ウィキの「竹齋」](#)によれば、作者は医師の富山道治（？）寛永一一（一六三四）年…伊勢国松坂の商家の出身。京の名医曲直瀬玄朔（天文一八（一五四九）年～寛永八（一六三二）年）について、医学を修めた）本作は、元和七（一六二一）年頃の成立と推定されている。『藪医竹斎を主人公にした遍歴体の小説で』、『作者の世相観察と竹斎の馬鹿げた医療を施す部分、そして名所案内の部分が多く絡み合った構成となっている。当時の滑稽文学の常套手段として狂歌を随所に挿入している』。『研究によれば、竹斎のモデルは師の曲直瀬玄朔であり、諸処からの批判を憚ってカモフラージュとして施された、慶長』（一五九六年～一六一五年）『の頃を匂わせるなどの仕掛けが随所に見られる』。『藪医者竹斎のキャラクターは、以後の種々の藪医者物の嚆矢となった。また、東海道中名所記の出現に影響を与えている。世相については、好色僧侶批判や見かけばかりで実力の当てにならぬ医師の氾濫など、当時の世相に対する批判も垣間見える』とある（著者は嘗ては江戸前期の公卿で歌人・能書家にして正二位権大納言であった烏丸光広とされてきたが、現行では富山の作とするのが有力である）。なお、別天樓は注していないが、これは明らかに、松尾芭蕉の、俳諧七部集第一の「冬の日」（荷兮編・貞享元（一六八四）年刊）に載る、

笠は長途の雨にほころび、昏衣は、

とまりとまりのあらしにもめたり。

侘つくしたるわび人、我さへあはれ

におぼえける。むかし狂歌の才士、

此國にたどりし事を、不圖おもひ出
て申し侍る。

狂句こがらしの身は竹齋に似たる哉
遠く意識しているものと私は思う。」

うくひすは笛の役なりうそは琴

「やぶちゃん注…「うそ」鸛。スズメ目アトリ科ウソ属ウソ *Pyrrhula pyrrhula*。私の「和漢三才圖會第四十三 林禽類 鸛（うそどり）（鸛・ウソ）」を参照されたい。鳴き声を含む動画もリンクさせてある。」

親の喪にこもりて

ほつりとさむき櫛の雫かな

ひいやり青麥くれて水雞哉

「やぶちゃん注…「水雞」はツル目クイナ科クイナ属クイナ *Rallus aquaticus*。同じく私の「和漢三才圖會第四十一 水禽類 水雞（クイナ・ヒクイナ）」を参照されたい。」

曇る日は猶ちからなき芙蓉かな

高々と辻念佛や夏木立

水仙の影やすゝとき鉢の水

【注】「水仙の影やすゝとき鉢の水」。「すゝとき」は鋭きこと、冴え切つて冷酷な貌をいふ。

木奴の苺子もときや春の雨
「やぶちゃん注…「木奴」九年母。ムクロジ目ミカン科属ミカン属マンダリンオレンジ品種クネンボ *Citrus reticulata* 'Kunenbo'。東南アジア原産の品種とされるが、本邦には室町後半に琉球王国を経由して齎された。皮が厚く、独特の匂いがある。果実が大きいことから、江戸時代にはキシウミカン *Citrus kinokuni* が広まるまでは、日本の関東地方まで広まっておき、本品種は本邦の柑橘類の祖先の一つとなっている（以上はウィキの「クネンボ」に拠った）。和名は、種を植えてから九年で実がなることに由来するという。」

凧や吹しこりたる雲のいろ

「やぶちゃん注…中七は「吹き凝りたる」で、寄り合つて一塊りとなった、の意であろう。」

打あける鰯の中のもみち哉

【注】「鰯」。鰯又は杜父魚と書く。鰯の字辭書に見當らず。淡水に産し常に水底の沙上に居る。長さ五六寸、形鰲に似て肥大なり。虫の「河鹿」にあらず。

「やぶちゃん注…「^{カジカ}鰯」条鰯綱カサゴ目カジカ科カジカ属カジカ *Cottus pollux* 及びカジカ科 *Cottidae* の類を指す。詳しくは私の「[大和本草卷之十三](#) [魚之下](#) [杜父魚](#)（[カジカ類](#)）」を参照されたい。なお、別天樓の「虫」は博物学的な広義のそれで、両生綱無尾目ナミガエル亜目アオガエル科カジカガエル属カジカガエル *Buergeria buergeri* を指している。」

鐘の音あらひ立たる時雨かな

早乙女に道をしへ行つはめ哉

印

印

辭 世

神代の御事はしらす中興名高き宇治川藤戸の先陣いつれの一番鎗七本鎗などいひ侍し武士の戦功尤世人は譽と云ふも可なるか殊に佐々木行當り智を以の先陣も可なるか中興より此先陣^ラ随一として是^ラ中興武士の大戦功と云ふ也こゝを取しづめ武道にて批判したる時に何とやらん其その深さ見へたる様にも有治國の武士は合戦を繪に書たるより外に見る事はなしされとも日の内には數百度の一番鎗を合はげしき大川を打渡り猶又いくはくの強戦功をもなし日本はいふにおよばす唐土天竺迄もひびきたる戦功^ラなし大石氏か忠死^ラ見る時は結句治國の武士はいと奥深^クたのもしうおもわれけり

「此なすび甲付の首の事也

氣に懸^ル一番鎗のなすひかな

阿 山 下

享保八年^{癸卯}六月廿二日

木 導

【注】「七本鎗」。天正十年五月賤ヶ嶽の役に、秀吉の部下加藤清正、福島正則、加藤嘉明、平野長泰、糟屋助則、脇阪安治、片桐且元等七人槍を振つて奮闘し、大に功を樹つ。これを七本槍と稱す。

「やぶちゃん注…別天樓の「七本鎗」はママ。原文は「七本鎗」である。また、「加藤嘉明」の部分は行末で終わって読点はないが、そのまま電子化するとおかしいので、読点を加えた。」

「やぶちゃん注…「見えたる」「おもわれけり」はママ。勝手自然流で辞世本文を読み易く書き直してみる。漢字表記代えや読みは自分の好みで、別に根拠はない。

*

神代の御事は、知らず、中興名高き、「宇治川」、「藤戸」の先陣、孰れの「一番鎧」・「七本鎧」などと言ひ侍りし武士の戦功、尤も、世人、是れを譽と云ふも可なるが、殊に、佐々木、行き當り、智を以つての先陣も可なるか。中興より、此の先陣を随一として、是れを中興武士の大戦功と云ふなり。こゝを取り鎮め、武道にて批判したる時に、何とやらん、其れ、底の深さ、見えたる様にも有る。治國の武士は、合戦を繪に書きたるより外に、見る事はなし。されども、日の内には、數百度の一番鎧を合はせ、はげしき大川を打ち渡り、猶ほ又、幾許の強戦功をなし、日本は言ふに及ばず、唐土・天竺まで響きたる戦功をなし、大石氏が忠死を見る時は、結句、治國の武士は、いと奥深く、たのもしう思はれけり。

*

『藤戸』の先陣 治承・寿永の乱に於ける戦いの一つである「藤戸の戦い」。寿永三／元暦元年十二月七日（ユリウス暦…一一八五年一月十日）に備前国児島の藤戸の海峡（現在の岡山県倉敷市藤戸）。グーグル・マップ・データで源範頼率いる平氏追討軍と、平家の平行盛軍の間で行われた戦い。詳しい経緯は参照したウイキの「藤戸の戦い」を見られたいが、『現在の藤戸周辺は干拓により陸地となっているが』、『合戦の当時は海に島が点在している状態であった。平行盛は』五百『余騎の兵を率いて備前児島（現在の児島半島）の』篝火蔵（現在の藤戸の南西に接する倉敷市粒江。そのグーグル・マップ・データで「平家本陣跡」が確認出来る）に『城郭を構えた。九州上陸を目指す源氏軍にとって、この山陽道の平氏拠点の攻略は必須課題であり、追討軍の佐々木盛綱が城郭を攻め落とすべく幅約』五百メートルの『海峡を挟んだ本土側の藤戸（現在の倉敷市有城）（先の二地域の北、ここ。グーグル・マップ・データ）（付近）に向かう。『吾妻鏡』によると、波濤が激しく船もないため、渡るのが難しく、『盛綱らが浜辺に轡を止めていたところ、行盛がしきりに挑発した。盛綱は武勇を奮い立たせ、馬に乗ったまま郎従』六『騎を率いて藤戸の海路三丁余りを押し渡り、向こう岸に辿り着いて』、『行盛を追い落としたという。平氏軍は敗走し、讃岐国屋島へと逃れた』。この合戦は「平家物語」の「藤戸合戦」の段で九月のこととして『書かれ、盛綱の活躍も吾妻鏡と一致しているが、盛綱が先陣の功を狙って浦の男に地形を尋ね、浅瀬を見つけた後』、『口封じの為に男を殺してしまう場面は、覚一本など語り本系の「平家物語」にのみに『見られ、延慶本や「源平盛衰記」には『ない話である』とある。

「佐々木、行き當り、智を以つての先陣」「佐々木」は佐々木高綱。「宇治川の戦い」での、彼と梶原景季の「宇治川の先陣争い」は「平家物語」で有名。そこで彼は策を用い、

*

佐々木、「如何に梶原殿、この河は西國一の大河ぞや。腹帯「馬に鞍を附ける腹帯。」の延びて見えさうぞ。縮め給へ」と云ひければ、梶原、『さもあるらん』と思ひけん、手綱を馬のゆがみ「鬣を束ねて結んだ部分。」に捨て「やぶちゃん注…さし置いて。」、左右の鎧を踏みすかし「踏んでいるのを外して。」、腹帯を解いてぞ縮めたりける。佐々木、その間に、馳せ抜いて、河へぎつと打入れたれる。

*

とあって、彼が先陣を執るのである。このシークエンスを木導は言ったのである。

「治國」天下泰平の江戸の御世を指す。

「強戦功」^{きやうせんこう}「こはいさをし」と訓じたかったが、それでは他の「戦功」の語とのバランスが悪くなるので、やめた。

「大石氏が忠死」赤穂浪士の討入は元禄十五年十二月十四日（グレゴリオ暦一七〇三年一月三十日）。木導が亡くなる享保八（一七二三）年僅か二十年前の出来事であった。

「氣に懸ル一番鎧のなすひかな」「氣に懸る一番鎧のなすひかな」で「なすび」は「茄子」で、一番鎧で捕った敵将の首級を、兜がついているままに鎧穗にぶら下げたものが茄子に似ているから言うのであろう。「かかる」は「かくる」で首級を鎧に懸ける意を掛けてもいる。死に際して、本来の武士としての一分を、この辞世の文と句に込めた。

「享保八年癸卯六月廿二日」「癸卯」は「みづのとう」。木導逝去の日である。グレゴリオ暦一七二三年七月二十三日。」

享保八年^{癸卯}六月廿二日阿山下木導雅父生年五十八歳にて死去右の誹書一卷子孫へ傳へ可申由被仰置候間相認申者也

此御辭世は後に書記^ス木導雅伯實父は上松氏三代目の次男にて直江氏へ養子に來三代目の家督^ヲ繼名乗は光任^{トウ}與云

右は年月ヲ隔候得は知れざるゆへにみづから書記^ス

印

東吟堂虎風

印

印

【注】「東吟堂虎風」。木導を呼びて雅父と稱せり。實子にや、女婿にや、或は然らざるにや、詳ならず。又「右の誹書一卷子孫へ傳へ可申由被仰置候間相認申者也」とあれば、この句集は虎風の筆録のやうにもあれど、又「此御辭世は後に書記す……右は年月を隔候得は知れざるゆへにみづから書記ス」とある筆蹟と發句の筆蹟は同一にあらず。木導辭世の文は虎風筆にて、發句は勇水筆と見る方穩當かと思ふ。

「やぶちゃん注…「ゆへ」はママ。本文末の書名の前にある印の囲みは角が丸い。

「辭世」と同じ仕儀で本文を勝手に書き代えてみる。

*

享保八年^{みづのとう}癸卯六月廿二日、阿山下^{あやました}の木導雅父^{がふ}、生年^{しやうねん}五十八歳にて死去、右の誹書一卷、子孫へ傳へ申すべき由、仰せられ置き候^{あひだ}ふ間、相ひ認め申す者なり。此の御辭世は、後に書き記す。木導雅伯、實父は上松氏三代目の次男にて、直江氏へ養子^{きた}に來り、三代目の家督を繼ぎ、名乗りは光任^{くわうにん}と云ふ。

右は年月を隔^{へだ}て候^{さうかへ}得ば、知れざるゆゑに、みづから書き記す。

*

「雅父」別天樓の「東吟堂虎風」（「とうぎんだうこふう」と読んでおく）の注でもどのよう

な人物かを探り得ていない。されば、この「父」は実の父ぐらいな年齢の年配者一般を指すと採り、次の「雅伯」に同じい謂いでとっておく。

「雅伯」風流の道に通じた人を敬って呼ぶ語で、ここは人名の下に付けて接尾語的に用いたもの。」

阿山下木導者^子亞父也其爲性也耽勇武熟技藝又好俳諧芭蕉翁遊于門深探本源廣極奧旨咏春風之絶勝稱奇異之逸物眞積力久獨得其宗一日語^予曰吾累年所吟艸稿滿筐笥徒爲鼠窠亦不傷乎投之^予使執筆^予諾而猥弗厭陋才句々輯爲冊傳之家門故心岡知攸錯矣時享保辛卯蕤賓上澣外姪功氏勇水書於千樹齋

【注】「亞父」。父に亞ぐ義、こゝにては叔父のことに用ひたのであらう。

「芭蕉翁遊于門」。遊^三于芭蕉翁之門とあるべきところ。原本のまゝにては、芭蕉が木導の門に教を受けたやうに聞えて宜しからず。

「稱奇異之逸物」。風俗文選にも此の如くあり。

「鼠窟」。鼠の巢穴。

「岡知攸錯」。岡は岡の誤。岡レ知レ攸レ錯矣なり。

「享保辛卯」。享保には辛卯の干支なし。原本には鼈頭に「享保癸卯」といふ帖紙あり、恐らく後人の附箋であらう。癸卯は享保八年で、木導逝去の歳に當る。理は當に然るべきである。

「やぶちゃん注」：「帖紙あり」は行末で句読点がないが、おかしいのでここは読点とした。」

「蕤賓」「スヰヒン」と讀む。陰曆五月の異名。

「やぶちゃん注」：歴史的仮名遣は「スイヒン」でよい。」

「外姪」。妻の兄弟の子。

「功氏勇水」。その傳詳でない。

「やぶちゃん注」：同前に仕儀で書き代えてみる。私の読解力の無さを差し置いて、何だが、この男の漢文、何だかへんな気がする。

*

阿山下の木導^{もくだうし}子^{あほ}は亞父なり。其の爲^{ひととなり}・性^{しやう}や、勇武に耽^{ふけ}り、技藝に熟^{じゆく}す。又、俳諧を好み、芭蕉翁が門に遊び、本源を深く探り、廣く奥旨^{おうし}を極め、春風^{しゅんふう}の絶勝を咏^{えい}じ、「奇異の逸物^{いちいちつ}」と稱され、眞^{まこと}に力を積み、久しくして、獨り、其の宗^{しゆ}を得たり。一日、予に語りて曰はく、「吾、累年、吟ずる所の艸稿、筐笥^{きやうし}に滿ち、徒らに鼠窠^{そさう}と爲る。亦、傷まざらんか」と、之れを投じ、予に筆を執らしめんとす。予、諾ひて、猥^{みだ}りに厭^{いと}はず。陋才^{ろうさい}、句々、輯^{しふ}して、冊と爲し、之れを家門に傳ふ。故^{ゆゑ}に、心、錯^{さく}せる攸^{いひ}ありて、知^ちに罔^{くら}し。時に享保辛卯蕤賓上澣^{じやうくわん}、外姪^{がいてつ}功氏^{こうし}勇水^{ゆうすい}、千樹齋^{せんじゆさい}にて書す。

*

「宗」ここは俳諧に於けるその核心の意。

「筐笥^{きやうし}」現代仮名遣「きょうし」。竹で編んだ籠型の入れ物。

「陋才」元は見識の狭いことを指すが、ここは自称の卑称。

「輯」材料を集めて纏めること。

「故、心、錯せる攸ありて、知に罔し」訓読自体がよく判らず、牽強付会してねじ曲げて無理矢理、訓じた。識者の御教授を乞うものである。

「上澣」現代仮名遣「じょうかん」で「上浣」とも書き、十月上旬、陰暦の十月初めの十日間を指す。

「千樹齋」不詳。自家の書齋の号か。

以下、野田別天楼の「開題」(ママ)であるが、途中に引く句などの字間空けは無視した。注は格段落末か、読みだけの場合は文中に挿入した。段落の頭の字空けがないはママである。」

水の音開題

川西和露氏藏、直江木導句集「水の音」寫本壹冊、美濃紙二十九枚、内に白紙三枚あり。表紙の中央に、金紙に「水の音」と書せる題簽を帖す。載するところ、木導の發句三百五十九、獨吟歌仙一、一家の集として完璧に近きものである。勇水の跋に隨へば、木導多年吟ずるところの艸稿徒らに鼠窠とならんことを患ひ「やぶちゃん注…「うれひ」」、その外姪勇水に筆を執らしめ、輯めて「やぶちゃん注…「まとめて」」。一冊子となしたもので、享保八年五月上旬に稿を脱し、越えて六月廿二日に木導は遠逝したのであつた。木導の自序によれば、この集は木導の住める彦根の阿山の鎮守に奉納したもののことだが、その發句の四季群類を分たず、得るに隨ひて筆録したものゝ如く、やゝ蕪雜の觀を呈してゐるのは、或は木導の病重きを加へ、句集としての體裁を整へる暇なく、倉皇稿を終りしものか。和露氏藏本には、木導自序の末に「阿山下」と刻せる陽印と「木導」と刻せる陰印を押捺せるより推定すれば、この書或は勇水の筆録せる稿本で、木導生前自ら捺印せしものではあるまいか。そしてその序文と發句が同一人の筆蹟なるは、當時病木導「やぶちゃん注…「びやうもくだう」」。自ら筆を執りて序文を書する能はず、勇水に命じて筆寫せしめたものではあるまいか。卷末に附せる木導の辭世と、その來由を書せる一文に、東吟堂虎風の筆寫するところで、木導歿後に加へたものではあるまいか、と自分は信ずるのである。この集に從來未だ刊行されたことを聞かず、寫本として傳はるものも多からざるべく、這回翻刻するに當りて、他本と比較することが出来なかつた。

「やぶちゃん注…「川西和露」(明治八(一八七五)年〱昭和二〇(一九四五)年)は俳人。兵庫県神戸市出身。本名は徳三郎。神戸商業卒。鉄材商を営み、神戸市議となつた。俳句は河東碧梧桐に師事し、俳誌『阿蘭陀渡』を創刊。句集に「和露句集」(六冊)がある。俳書の蒐集に熱心で、その蒐集本は天理図書館に収蔵されている(以上は日外アソシエーツ「20世紀日本人名事典」に拠つた)。

「倉皇」(さうくわう(そうこう))は「蒼惶」とも書く。形容動詞タリ活用で「慌ただしい

さま」を謂う。

「這回」音だと「シヤクワイ(シヤカイ)」だが、これで「このたび」と当て訓する。同義の「這般」(しやはん(しやはん))がよく知られる。「這」は中国語の俗語で「此」(この)の意で、「這般」は「これら・この辺・このたび」今般」の意で、通常、「しやはん」と読む場合は「の」を伴って用いる。」

『水の音』といふ題號は木導の發句「春風や麥の中ゆく水の昔」に囚んだもので、この句に就ては李由許六共撰の『宇陀の法師』に「景曲の句」とて、

春風や麥の中行水の音

木導

師説云、景氣の句、歐間容易にする以の外の事也。大事の物也。連歌に景曲と云。いにしへの宗匠ふかくつゝしみ、一代一兩句には過ず。景氣の句初心まねよき故、深くいましめり。誹諧は連歌程にいまず。惣別景氣の句は皆ふるし。一句の曲なくては成がたき故、つよくいましめ置きたる也。木導が春風景曲第一の句也。後代手本たるべしとて、褒美に「かけろふいさむ花の糸口」と云脇して送られたり。平句同前也。歌に景曲は見様體に屬すと。定家卿もの給ふ也。寂蓮の急雨、定頼卿の宇治の網代木、是見るやう體の歌也。

「やぶちゃん注」・「宇陀の法師」推定で元禄一五(一七〇二)年刊。

「體」は二箇所とも「てい」と読んでおく。」

許六では芭蕉の説として、この句を賞揚してゐる、かやうに當時名聲を博した句であるから、作者木導も自負したものゝ如く、この句集の自序の中でも芭蕉の説を引き「小松生ひなでしこ咲るいはほ哉」と「古池や蛙とびこむ水の音」と木導の「麥の中行水の音」の三句は「うづれも甲乙なき万代不易第一景曲玄妙の三句也」と得意の聲を洩らしてゐる。かく句集の標題にまで用ひた名譽のこの句が、この句集の中に載録されてゐないのはどうしたことか。序文の中に書いてあるから重複を避けたものであらうか。

「やぶちゃん注」・というわけで本電子化では冒頭の私の注の中で最初に示したのである。」

「木導者江州龜城之武士也。直江氏、自號三阿山人」。蕉門之英才也。師翁稱三奇異逸物」。」と許六の風俗文選作者列傳に記してゐる。彦根城は金龜山の上に在れば、金龜城と稱し、金城とも龜城とも呼ばれてゐた。木導は許六と同じく、その彦根の武士であつた。水の音の序に自ら記して「はせを庵の松の扉をたゝき、翁の流を五老井と共に汲つくす事三十年。」と言つてゐるが、この序は享保八年に書いたものと推定されるから。その三十年前に遡れば、元禄六七年頃に當り、芭蕉晩年の入門であるこゝと首肯される。計六の歴代滑稽傳に「芭蕉東武下向の時四梅廬に漂泊し給ふ。木導汶村「やぶちゃん注」・「ぶんそん」。」は方違してつゝゐに「やぶちゃん注」・ママ。」逢はず。文通に、木導はかたの如くの作者なりと、稱美あり」といへり。芭蕉が幻住庵を出て京津の間を逍遙し、孤影蕭然として江戸に向つたのは元禄四年の冬で、その途すがら四梅廬に李由を訪づれて、しばらく卓錫した。その折彦根附近の俳人は芭蕉の聲咳に接したことゝ思はれるが、木導と汶村は何れへか行違つて芭蕉に面晤することが出来なかつたのであつた。されば、「はせを庵の松の扉をたゝき」と木導が言つてゐるのは、その後江戸祇役の際に深川の庵を音づれたものか。何れにしても木導が芭蕉に親炙したのは、元禄五年以降のこととて木導の句が七部集に載録されてゐないことも、彼が芭蕉

晩年の入門であつて、炭俵撰集の頃にはまだ頭角を現はしてゐなかつたからであらう。葎甘介我の著した『風俗文選犬註解』には木導の傳譜については何等記するところがないが、

春風や麥の中ゆく水の昔

此句始は上の五言「姉川や」と冠したり。翁「春風や」と直されし也。姉川は江州にて麥よろしき所なりと。

といひ、又

木導子か名木は、家中一番のはつさくらなり。春毎に花見の席をまうく。

指折のこれや家中のはつさくら 許六

雛賣のほめて通るや初櫻

子供君の客あいさつや初櫻

とあり。家中一番の巨櫻樹を庭園内に有してゐた木導は、相應の武士であつたであらうとは想像されるが、未だ文獻の徴すべきものがない。『水の音』の巻尾にある勇水の記によれば、木導は武藝に熟達してゐた眞の武士であつたやうだ。東吟堂虎風の記によれば、木導は本姓上松氏で、直江氏へ養子に來て家督を繼ぎ、名は光任といひ、享保八年六月二十二日、五十八歳で逝去したのである。木導の歿年に就いては他書見る所なく、虎風の記述によつてその缺を補ふことは、木導の爲に喜ぶべきである。

「やぶちゃん注」『芭蕉晩年』芭蕉は元禄七年十月十二日（一六九四年十一月二十八日）没であるから、最晩年と言つてよい。

「卓錫」「たくしやく」（たくしやく）。僧形の芭蕉の「滞在」を錫杖しやくじょうを机上に置くと譬えたもの。

「警咳」（けいがい）「に接」するは、尊敬する人に直接話を聞くこと、お目にかかるの意。

「警」「咳」も元はともに「咳せき」「咳払い」の意。

「面晤」「めんご」と読む。面会すること。面会して話し合うこと。「晤」は「逢う・向い合う」や「打ち解ける」の意があるから、ここは親しく対座して語り合うという謂いでよい。

「祇役」「しえき」。主君の下で勤務すること。因みに当時の彦根藩主は第四代藩主及び第七代藩主であつた井伊直興なおきである。

「葎甘介我」（りっかん かいが 生没年未詳）江戸中・後期の俳人。岩波午心に師事した。

芭蕉門下の俳人佐保介我の子孫で、七世介我を繼いだ。「風俗文選犬註解」は蕉門の俳文集に注釈や絵図を加えたもので、ヒットし、版を重ねた。

「姉川」琵琶湖の北東岸を流れる姉川あねがわの流域（グーグル・マップ・データ）。

風俗文選に、木導の「出女説」「やぶちゃん注」『でをんなのせつ』。及び「天狗辯」「やぶちゃん注」『てんぐのべん』。がある。出女説は「爰に道人がりの遊君ありてに人の魂をとらかす意氣張「やぶちゃん注」『いきはり』」も見えず。まして歌よむ程の戀にてもなし。たゞ物くひ酒のみ、言語進退のやさき事は、かりに和光同塵の姿をあらはし、慈悲第一の出女とはいふなりけり」と。彼が士分の身なるに拘はらず、世情に通じ俗風に明なるは、驚くばかりである。天狗辯に至りては、飄逸の想輕妙の筆、巧に諷刺して人の腸「やぶちゃん注」『はらわた』。を寒からしむ。後の也有の俳文は、この天狗抑の筆致の流を汲むものといふべきか。その文、

萬「やぶちゃん注…「よろづ」」の形ある物、いづれか畫圖「やぶちゃん注…「ぐわと」」にうつされぬ物はあらじ。されど眞向「やぶちゃん注…「まむき」」の天狗ばかりになるまじとて、繪かく人は常に笑ひ侍りけり。いかにぞや、天狗しりの古法眼も、正面の鼻にはこまりぬらん。此もの神祇釋教にもあらず、人倫生類の部をのがれて、俳諧の梢にはよき道具ならむ。世の人の我慢増長すれば鼻にあらはれ、天狗となりて杉の梢に居をトメ

「やぶちゃん注…「しめ」」、愛宕高雄の山住を好み、都の秋のなつかしとや、うき世の嵯峨のあたり近き、嵐の山の夜あらしに、木の葉天狗ぞさそはるゝ。又は大峰かつらぎや、高間の山の花ざかり、富士の高根にねふりては、月雪のふる里をわすれたる、浮世のさまぞあはれなる。されど名歌な

どよむべき顔にもあらず。かの里も出かはりやありけむ。虚氣「やぶちゃん注…「うつけ」」たるをたぶらかし、嫁取もせぬ宿に礫「やぶちゃん注…「つぶて」」を打かけ、火事

「やぶちゃん注…「ひご」と」をすかれたるこそうるさけれ。かゝる境界にも何の奢かありて、無盡の沙汰には及び、天狗頼子「やぶちゃん注…「たのもし」」と人にはいはれ、弦めその一座につらなり、六波羅の酒盛は、酔狂ひの擧句といぶかし。うるさき顔にても花の都人を戀そめ、牛若殿に浮名をながし、心中のしるしにや爪をはなし、果は竹生島に送られてたから物の數には入りぬ。ある人洛の大儒に天狗を問ふ。これ深山幽谷のいきれよりかゝる變異は生ずる也。何の怪とするにたらんと。されば天狗を山谷のいきれといはゞ、麟鳳「やぶちゃん注…「りんほう」」は聖人のいきれならん。尾長虫は糞土のいきれにして、虱に乞食のいきれなる事慥なるべし。

「やぶちゃん注…以上は木導の「天狗ノ辯」の全篇である。私は先の「出女ノ説」とこの二篇を、**将来、ちゃんと電子化注したく思っている**。されば、二つだけの注で終わらせたい。

「弦めそ」これは「つるめそ」と読み、鎌倉時代から江戸時代にかけて、京都の清水坂や建仁寺の附近に集住した賤民の一種の差別呼称である。本来の名称はやはり差別呼称で「犬神人」と呼びならわされ、祇園社（八坂神社）に隷属する、最下級の神職である「神人」（これも差別呼称であるので注意されたい）として、境内地や墓所などの清掃、祇園御霊会（祇園祭）の際の神幸の警護、神幸路の清めなどを主な任務にするとともに、特に中世に於いては比叡山延暦寺の末社であった祇園社の軍事的・警察的組織の主要な一部を構成して縦横に活躍した集団を指す語である。

「高間」「たかま」で、現在の大阪府と奈良県の境にある[金剛山](#)（グーグル・マップ・データ）の別称で、金剛山地の主峰。標高千二百二十五メートル。山頂に金剛山転法輪寺、西麓には、かの千早城跡がある。修験道の山として知られる。」

水の音解説。

「やぶちゃん注…既に注した通り、ここ以下にある（始まりは[ここ](#)の左ページ後ろから四行目から始まり、[ここ](#)の左ページ六行目で終わる、約十ページ弱分）別天樓氏の手になる各個の解説注記は総てを各個のパートに移して、既に読者の便に供したので、ここでは省略する。」

本翻刻はなるべく原本の體裁を保持することに注意し、假名遣の誤謬、文法の破格も一切訂

正せず、文字魯魚の誤も元のまゝとし、開題中に於て註記することにした。濁點も原本に附してあるものゝほかは、一切之を施さざることにした。

大正十五年五月

野田別天樓

「やぶちゃん注…「魯魚の誤」「ろぎよのあやまり」。「烏焉馬^{うえんま}の誤り」がよく知られる。「魯」と「魚」は孰れも字形が似通っており、草書などでは特にしばしば誤り易いところから、似た別字との文字の誤りを言う語。

「大正十五年」一九二六年。この大正十五年十二月二十五日に大正天皇が四十七歳で崩御、皇太子裕仁親王（後の昭和天皇）が踐祚し、昭和に改元した。」

「やぶちゃん注…以下、「附録」と称した本「蕉門珍書百種」叢書関連の追記記事が八ページに亘って続くが、本「水の音」とは全く関係がないので省略した。その後に奥附があるが、リンクで済ませる。その後にも広告が延々と続くが、無論、それも省略した。

なお、本電子化注は、二〇〇二年度に私が作成した電子テキストの中では、最も手を掛けた作物（まる三日間をこのために費やした点で特異点である）の一つとなった。」